

（案）

農薬評価書

MCPB※

2018年7月12日

食品安全委員会農薬専門調査会

※ 本評価書ではMCPBエチルについて評価を行った。

目次

1	目次	頁
2		
3	○審議の経緯.....	3
4	○食品安全委員会委員名簿.....	3
5	○食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿.....	3
6	○要約.....	7
7		
8	I. 評価対象農薬の概要.....	8
9	1. 用途.....	8
10	2. 有効成分の一般名.....	8
11	3. 化学名.....	8
12	4. 分子式.....	8
13	5. 分子量.....	8
14	6. 構造式.....	8
15	7. 開発の経緯.....	8
16		
17	II. 安全性に係る試験の概要.....	10
18	1. 動物体内運命試験.....	10
19	(1) 吸収.....	10
20	(2) 分布.....	10
21	(3) 代謝.....	11
22	(4) 排泄.....	12
23	2. 植物体内運命試験.....	13
24	(1) 水稻.....	13
25	(2) ネーブルオレンジ.....	14
26	(3) りんご.....	15
27	3. 土壌中運命試験.....	17
28	(1) 好氣的湛水土壌中運命試験.....	17
29	(2) 好氣的土壌中運命試験.....	20
30	(3) 土壌吸着試験（分解物B）.....	21
31	4. 水中運命試験.....	21
32	(1) 加水分解試験①.....	21
33	(2) 加水分解試験②.....	22
34	(3) 水中光分解試験①.....	23
35	(4) 水中光分解試験②.....	25
36	5. 土壌残留試験.....	25
37	6. 作物残留試験.....	26
38	7. 一般薬理試験.....	26

1	8. 急性毒性試験.....	27
2	9. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験.....	28
3	10. 亜急性毒性試験.....	28
4	(1) 13 週間亜急性毒性試験（ラット）.....	28
5	(2) 13 週間亜急性毒性試験（マウス）.....	29
6	(3) 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）.....	29
7	(4) 28 日間亜急性神経毒性試験（ラット）.....	30
8	11. 慢性毒性試験及び発がん性試験.....	30
9	(1) 2 年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）.....	30
10	(2) 78 週間発がん性試験（マウス）.....	31
11	12. 生殖発生毒性試験.....	31
12	(1) 2 世代繁殖試験（ラット）①.....	31
13	(2) 2 世代繁殖試験（ラット）②<参考資料>.....	32
14	(3) 発生毒性試験（ラット）.....	33
15	(4) 発生毒性試験（ウサギ）.....	34
16	13. 遺伝毒性試験.....	35
17	14. その他の試験.....	36
18	(1) ラットを用いた血液学的及び血液生化学的検査に及ぼす影響<参考資料>...	36
19		
20	Ⅲ. 食品健康影響評価.....	37
21		
22	・別紙 1：代謝物/分解物略称.....	44
23	・別紙 2：検査値等略称.....	45
24	・別紙 3：作物残留試験成績.....	46
25	・参照.....	62
26		
27		

1 <審議の経緯>

1983年 4月 22日 初回農薬登録
2005年 11月 29日 残留農薬基準告示（参照1）
2012年 10月 19日 農林水産省から厚生労働省へ農薬登録申請に係る連絡及び
基準値設定依頼（適用拡大：かんきつ及び日本なし）
2014年 3月 20日 厚生労働大臣から残留基準設定に係る食品健康影響評価に
ついて要請（厚生労働省発食安0320第7号）
2014年 3月 25日 関係書類の接受（参照2～4）
2014年 3月 31日 第509回食品安全委員会（要請事項説明）
2014年 7月 10日 第36回農薬専門調査会評価第三部会
2018年 5月 11日 追加資料受理（参照5～8）
2018年 6月 4日 第74回農薬専門調査会評価第三部会
2018年 7月 12日 第161回農薬専門調査会幹事会

2

3 <食品安全委員会委員名簿>

(2012年6月30日まで)	(2015年6月30日まで)	(2017年1月6日まで)
小泉直子（委員長）	熊谷 進（委員長）	佐藤 洋（委員長）
熊谷 進（委員長代理*）	佐藤 洋（委員長代理）	山添 康（委員長代理）
長尾 拓	山添 康（委員長代理）	熊谷 進
野村一正	三森国敏（委員長代理）	吉田 緑
畑江敬子	石井克枝	石井克枝
廣瀬雅雄	上安平冽子	堀口逸子
村田容常	村田容常	村田容常

*：2011年1月13日から

4

(2018年6月30日まで)	(2018年7月1日から)
佐藤 洋（委員長）	佐藤 洋（委員長）
山添 康（委員長代理）	山本茂貴（委員長代理）
吉田 緑	川西 徹
山本茂貴	吉田 緑
石井克枝	香西みどり
堀口逸子	堀口逸子
村田容常	吉田 充

5

6 <食品安全委員会農薬専門調査会専門委員名簿>

(2014年3月31日まで)

・幹事会

納屋聖人（座長）	上路雅子	松本清司
西川秋佳*（座長代理）	永田 清	山手丈至**
三枝順三（座長代理**）	長野嘉介	吉田 緑
赤池昭紀	本間正充	

・評価第一部会

上路雅子 (座長)	津田修治	山崎浩史
赤池昭紀 (座長代理)	福井義浩	義澤克彦
相磯成敏	堀本政夫	若栗 忍
・評価第二部会		
吉田 緑 (座長)	桑形麻樹子	藤本成明
松本清司 (座長代理)	腰岡政二	細川正清
泉 啓介	根岸友恵	本間正充
・評価第三部会		
三枝順三 (座長)	小野 敦	永田 清
納屋聖人 (座長代理)	佐々木有	八田稔久
浅野 哲	田村廣人	増村健一
・評価第四部会		
西川秋佳* (座長)	川口博明	根本信雄
長野嘉介 (座長代理*; 座長**)	代田眞理子	森田 健
山手丈至 (座長代理**)	玉井郁巳	與語靖洋
井上 薫**		* : 2013年9月30日まで ** : 2013年10月1日から

1

(2016年3月31日まで)

・幹事会		
西川秋佳 (座長)	小澤正吾	林 真
納屋聖人 (座長代理)	三枝順三	本間正充
赤池昭紀	代田眞理子	松本清司
浅野 哲	永田 清	與語靖洋
上路雅子	長野嘉介	吉田 緑*
・評価第一部会		
上路雅子 (座長)	清家伸康	藤本成明
赤池昭紀 (座長代理)	林 真	堀本政夫
相磯成敏	平塚 明	山崎浩史
浅野 哲	福井義浩	若栗 忍
篠原厚子		
・評価第二部会		
吉田 緑 (座長) *	腰岡政二	細川正清
松本清司 (座長代理)	佐藤 洋	本間正充
小澤正吾	杉原数美	山本雅子
川口博明	根岸友恵	吉田 充
桑形麻樹子		
・評価第三部会		
三枝順三 (座長)	高木篤也	中山真義
納屋聖人 (座長代理)	田村廣人	八田稔久
太田敏博	中島美紀	増村健一
小野 敦	永田 清	義澤克彦

・評価第四部会

西川秋佳（座長）	佐々木有	本多一郎
長野嘉介（座長代理）	代田眞理子	森田 健
井上 薫**	玉井郁巳	山手丈至
加藤美紀	中塚敏夫	與語靖洋

*：2015年6月30日まで

**：2015年9月30日まで

1

（2018年3月31日まで）

・幹事会

西川秋佳（座長）	三枝順三	長野嘉介
納屋聖人（座長代理）	代田眞理子	林 真
浅野 哲	清家伸康	本間正充*
小野 敦	中島美紀	與語靖洋

・評価第一部会

浅野 哲（座長）	桑形麻樹子	平林容子
平塚 明（座長代理）	佐藤 洋	本多一郎
堀本政夫（座長代理）	清家伸康	森田 健
相磯成敏	豊田武士	山本雅子
小澤正吾	林 真	若栗 忍

・評価第二部会

三枝順三（座長）	高木篤也	八田稔久
小野 敦（座長代理）	中島美紀	福井義浩
納屋聖人（座長代理）	中島裕司	本間正充*
腰岡政二	中山真義	美谷島克宏
杉原数美	根岸友恵	義澤克彦

・評価第三部会

西川秋佳（座長）	加藤美紀	高橋祐次
長野嘉介（座長代理）	川口博明	塚原伸治
與語靖洋（座長代理）	久野壽也	中塚敏夫
石井雄二	篠原厚子	増村健一
太田敏博	代田眞理子	吉田 充

*：2017年9月30日まで

2

（2018年4月1日から）

・幹事会

西川秋佳（座長）	代田眞理子	本間正充
納屋聖人（座長代理）	清家伸康	松本清司
赤池昭紀	中島美紀	森田 健
浅野 哲	永田 清	與語靖洋
小野 敦	長野嘉介	

・評価第一部会

浅野 哲（座長）	篠原厚子	福井義浩
----------	------	------

平塚 明 (座長代理)	清家伸康	藤本成明
堀本政夫 (座長代理)	豊田武士	森田 健
赤池昭紀	中塚敏夫	吉田 充*
石井雄二		
・評価第二部会		
松本清司 (座長)	桑形麻樹子	山手丈至
平林容子 (座長代理)	中島美紀	山本雅子
義澤克彦 (座長代理)	本多一郎	若栗 忍
小澤正吾	増村健一	渡邊栄喜
久野壽也		
・評価第三部会		
小野 敦 (座長)	佐藤 洋	中山真義
納屋聖人 (座長代理)	杉原数美	八田稔久
美谷島克宏 (座長代理)	高木篤也	藤井咲子
太田敏博	永田 清	安井 学
腰岡政二		
・評価第四部会		
本間正充 (座長)	加藤美紀	玉井郁巳
長野嘉介 (座長代理)	川口博明	中島裕司
與語靖洋 (座長代理)	代田眞理子	西川秋佳
乾 秀之	高橋祐次	根岸友恵

* : 2018年6月30日まで

1
2
3
4

<第161回農薬専門調査会幹事会専門参考人名簿>

上路雅子	三枝順三	林 真
------	------	-----

1 要 約

2
3 フェノキシ系除草剤である「MCPB エチル」（CAS No.10443-70-6）について、
4 各種資料を用いて食品健康影響評価を実施した。

5 評価に用いた試験成績は、動物体内運命（ラット）、植物体内運命（水稻、りんご
6 等）、作物残留、亜急性毒性（ラット、マウス及びイヌ）、亜急性神経毒性（ラット）、
7 慢性毒性/発がん性併合（ラット）、発がん性（マウス）、2世代繁殖（ラット）、発
8 生毒性（ラット及びウサギ）、遺伝毒性等の試験成績である。

9 各種毒性試験結果から、MCPB エチル投与による影響は、主に体重（増加抑制）
10 及び腎臓（重量増加等）に認められた。神経毒性、発がん性、繁殖能に対する影響及
11 び遺伝毒性は認められなかった。

12 ラットを用いた発生毒性試験において、母動物に毒性影響の認められる用量で心室
13 中隔欠損の増加が認められた。ウサギを用いた発生毒性試験において、催奇形性は認
14 められなかった。

15 各種試験結果から、農産物中の暴露評価対象物質を MCPB エチル並びに代謝物 B
16 及び C と設定した。

17 各試験で得られた無毒性量のうち最小値は、ラットを用いた 2 世代繁殖試験①の
18 1.24 mg/kg 体重/日であったことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した
19 0.012 mg/kg 体重/日を一日許容摂取量（ADI）と設定した。

20 また、MCPB エチルの単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響に対す
21 る無毒性量のうち最小値は、ウサギを用いた発生毒性試験で得られた 20 mg/kg 体重/
22 日であったことから、これを安全係数 100 で除した 0.2 mg/kg 体重を急性参照用量
23 （ARfD）と設定した。

24
25

1 **I. 評価対象農薬の概要**

2 **1. 用途**

3 除草剤

5 **2. 有効成分の一般名**

6 和名：MCPB エチル

7 英名：MCPB-ethyl (ISO 名)

9 **3. 化学名**

10 **IUPAC**

11 和名：エチル=4-(4-クロロ-*o*-トリルオキシ)ブチラート

12 英名：ethyl 4-(4-chloro-*o*-tolylxy)butyrate

14 **CAS (No. 10443-70-6)**

15 和名：エチル=4-(4-クロロ-2-メチルフェノキシ)ブタノアート

16 英名：ethyl 4-(4-chloro-2-methylphenoxy)butanoate

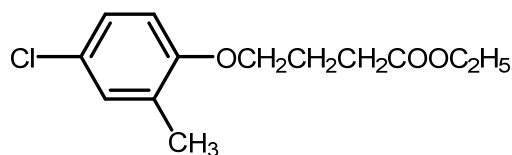
18 **4. 分子式**

19 $C_{13}H_{17}ClO_3$

21 **5. 分子量**

22 256.7

24 **6. 構造式**



28 **7. 開発の経緯**

29 MCPB は、May&Baker 社により開発されたフェノキシ系除草剤で、酸、エチル
30 エステル又はナトリウム塩の形で用いられている。MCPB は、茎葉から吸収され
31 ると植物体内でβ-酸化酵素により MCPA に変化する。植物体内のオーキシシン活性
32 を高め、正常な成長レベルを抑制することで植物を枯死させると考えられている。

33 国内では MCPB エチルが 1983 年に初回農薬登録された。ポジティブリスト制度
34 導入に伴う暫定基準が設定されている。今回、農薬取締法に基づく農薬登録申請（適
35 用拡大：かんきつ及び日本なし）がなされている。

- 1 残留農薬基準は MCPB で設定されているが、各試験は MCPB エチルで実施され
- 2 ている。本評価書においては、MCPB エチルを評価した。
- 3
- 4

II. 安全性に係る試験の概要

各種運命試験 [II. 1~4] は、MCPB エチルのフェニル基の炭素を均一に ^{14}C で標識したもの（以下「 ^{14}C -MCPB エチル」という。）を用いて実施された。放射能濃度及び代謝物濃度は、特に断りがない場合は比放射能（質量放射能）から MCPB エチルの濃度（mg/kg 又は $\mu\text{g/g}$ ）に換算した値として示した。

代謝物/分解物略称及び検査値等略称は別紙 1 及び 2 に示されている。

1. 動物体内運命試験

(1) 吸収

① 血中濃度推移

SD ラット（一群雌雄各 4 匹）に ^{14}C -MCPB エチルを 4 mg/kg 体重（以下 [1.] において「低用量」という。）又は 250 mg/kg 体重（以下 [1.] において「高用量」という。）で単回経口投与し、血中濃度推移について検討された。

血漿中薬物動態学的パラメータは表 1 に示されている。

薬物動態学的パラメータにおいて、明確な性差は認められなかった。（参照 2、6）

表 1 血漿中薬物動態学的パラメータ

投与量	4 mg/kg 体重		250 mg/kg 体重	
	雄	雌	雄	雌
$T_{\max}(\text{hr})$	1.8	2.0	22.5	13.5
$C_{\max}(\mu\text{g/mL})$	10.3	12.9	271	256
$T_{1/2}(\text{hr})$	4.1	4.9	11.9	11.3
$\text{AUC}_{0-\infty}(\text{hr} \cdot \mu\text{g/mL})$	85.7	140	11,600	9,110

② 吸収率

排泄試験 [1. (4)] における尿、ケージ洗浄液、カーカス¹及び組織中の放射能濃度より、吸収率は少なくとも 93.4% と算出された。

(2) 分布

SD ラット（一群雌雄各 7 匹）に ^{14}C -MCPB エチルを低用量又は高用量で単回経口投与し、体内分布試験が実施された。

主要臓器及び組織における残留放射能濃度は表 2 に示されている。

低用量投与群において、組織中の残留放射能濃度は投与 2 時間後に全ての組織で最大となり、その後経時的に減少した。投与 72 時間後にカーカスを除く組織中に合計 0.24% TAR ~ 0.26% TAR 認められ、主に肝臓、脂肪及び腎臓に残留した。

高用量投与群において、組織中の残留放射能濃度は、雌の全ての組織並びに雄

¹ 組織・臓器を取り除いた残渣のことをカーカスという（以下同じ。）。

1 の副腎及び脂肪を除く全ての組織では投与 24 時間後に、雄の副腎及び脂肪では
2 48 時間後に最大となり、その後経時的に減少した。投与 120 時間後にはカーカ
3 スを除く組織中に合計 0.23%TAR~0.38%TAR 認められ、雄では脂肪、肝臓及び
4 副腎、雌では脂肪、副腎、卵巣、子宮及び膀胱に残留した。

5 いずれの投与群においても、性差は認められなかった。(参照 2、6)

7 表 2 主要臓器及び組織における残留放射能濃度 (µg/g)

投与量 (mg/kg 体重)	性別	T _{max} 付近*	72 又は 120 時間後**
4	雄	腎臓(14.1)、血漿(12.4)、肝臓(8.10)、 全血(6.50)、肺(3.81)、心臓(3.04)、 下垂体(2.16)、甲状腺(2.14)	肝臓(0.144)、脂肪(0.114)、腎臓 (0.065)、副腎(0.058)、カーカ (0.044)、膀胱(0.032)、前立腺(0.016)、 胸腺(0.013)、肺(0.010)、骨(0.010)
	雌	血漿(15.3)、腎臓(11.8)、全血(7.16)、 肝臓(7.09)、肺(4.92)、心臓(3.95)、 子宮(3.38)、卵巣(3.38)	肝臓(0.160)、腎臓(0.104)、脂肪 (0.071)、膀胱(0.036)、カーカ (0.032)、卵巣(0.028)、副腎(0.027)、 子宮(0.022)、血漿(0.014)
250	雄	血漿(238)、腎臓(155)、全血(145)、 肝臓(134)、肺(102)、心臓(81.1)、血 球(74.9)、副腎(65.7)	脂肪(9.35)、肝臓(8.94)、副腎(8.82)、 カーカ(5.88)、腎臓(3.15)、前立腺 (3.08)、膀胱(3.01)、胸腺(1.77)、骨 (1.72)、肺(1.52)、甲状腺(1.28)、筋 肉(1.27)、骨髓(1.13)、血球(1.05)、 全血(0.945)
	雌	血漿(247)、全血(156)、腎臓(153)、 肝臓(125)、副腎(118)、肺(116)、脂 肪(101)、卵巣(83.4)、子宮(78.9)、 心臓(78.7)、血球(73.6)	脂肪(36.7)、副腎(17.3)、卵巣(13.9)、 子宮(12.6)、膀胱(9.48)、カーカ (6.30)、肝臓(5.62)、腎臓(3.32)、筋 肉(2.27)、骨髓(2.00)、胸腺(1.68)、 肺(1.58)、甲状腺(1.57)、脾臓(1.31)、 骨(1.27)、全血(0.985)、血球(0.975)、 血漿(0.529)

8 * : 低用量投与群は投与 2 時間後、高用量投与群は投与 24 時間後

9 ** : 低用量投与群は投与 72 時間後、高用量投与群は投与 120 時間後

11 (3) 代謝

12 排泄試験[1. (4)]における尿、糞及びケージ洗浄液を試料として、代謝物同定・
13 定量試験が実施された。

14 尿、糞及びケージ洗浄液中の主要代謝物は表 3 に示されている。

15 未変化の MCPB エチルは尿及び糞中に認められなかった。

16 低用量投与群の尿中における主な代謝物は C であり、ほかに代謝物 E、F、H、
17 I 及び K が認められた。代謝物のプロファイルに性差は認められなかった。

18 高用量投与群の尿中における主な代謝物は C であり、ほかに代謝物 E、F、G、
19 H 及び K が認められた。

20 いずれの投与群においても、糞中代謝物として C、E、F 及び H が認められた。

1 (参照 2、6)

2

3

表 3 尿、糞及びケージ洗浄液中の主要代謝物 (%TAR)

投与量 (mg/kg 体重)	性別	試料	MCPB エチル	代謝物
4	雄	尿	ND	C(35.7)、I(15.8)、H(10.3)、K(5.81)、E/F*(2.71)
		糞	ND	H(0.45)、C(0.37)、E/F* (0.19)
		ケージ洗浄液	ND	C(4.18)、H(1.12)、E/F* (0.51)、I(0.02)
	雌	尿	ND	C(34.2)、I(16.4)、H(10.2)、K(5.22)、E/F* (3.01)
		糞	ND	C(0.31)、H(0.30)、E/F* (0.15)、K(0.01)
		ケージ洗浄液	ND	C(2.38)、H(1.05)、E/F* (0.42)
250	雄	尿	ND	C(33.2)、E/F* (17.1)、H(8.01)、G** (7.13)、K(1.60)
		糞	ND	C(1.82)、E/F* (1.37)、H(1.05)
		ケージ洗浄液	ND	C(2.63)、E/F* (1.67)、H(1.16)、K(0.10)
	雌	尿	ND	C(33.7)、H(14.3)、E/F* (8.38)、G** (7.84)、K(0.97)
		糞	ND	H(1.33)、C(0.81)、E/F* (0.76)
		ケージ洗浄液	ND	C(4.36)、H(2.49)、E/F* (1.11)、K(0.08)

4 ND：検出されず、*：E 及び F の混合物、**：主要成分として G を含む画分

5

6

7 MCPB エチルのラットにおける主要代謝経路は、①エステル結合の加水分解
8 による代謝物 B の生成、②代謝物 B のβ-酸化による代謝物 C の生成と推定代謝
9 物 D を経由した代謝物 I の生成、③代謝物 C のメチル基酸化による代謝物 E の
10 生成、④代謝物 C のグルタチオン抱合体を經由した代謝物 J の生成とそれに続く
11 K の生成及び⑤代謝物 B のメチル基又は側鎖の酸化による代謝物 G 又は H の生
12 成が考えられた。

13

13 (4) 排泄

14 SD ラット（一群雌雄各 7 匹）に ¹⁴C-MCPB エチルを低用量又は高用量で単回
15 経口投与し、排泄試験が実施された。

16 投与後 72 又は 120 時間の尿及び糞中排泄率は表 4 に示されている。

17 投与量の大部分が尿及びケージ洗浄液に認められ、放射能は主に尿中に排泄さ
18 れた。代謝試験[1. (3)]において、ケージ洗浄液には尿中の主要代謝物が認めら
19 れたため、ケージ洗浄液中の放射能は尿由来のものと考えられた。（参照 2、6）

20

21

表 4 投与後 72 又は 120 時間の尿及び糞中排泄率 (%TAR) *

投与量	4 mg/kg 体重		250 mg/kg 体重	
	雄	雌	雄	雌
尿	87.1	85.5	82.2	79.4
ケージ洗浄液	10.5	8.97	9.12	11.7

糞	4.48	3.66	7.19	6.26
カーカス	0.93	0.68	1.79	1.93
組織	0.25	0.28	0.25	0.38

*：低用量投与群は投与後 72 時間、高用量投与群は投与後 120 時間

2. 植物体内運命試験

(1) 水稻

約第 2.0 葉期の稲（品種：コシヒカリ）を湛水条件下のワグネルポットに移植し、移植 21 日後に、¹⁴C-MCPB エチルを 1.59 mg ai/ポットの用量で水層に処理し、処理 35 日後（中間採取期）に茎葉部を、処理 91 日後（最終収穫期）に玄米、もみ殻、稲わら及び根部（水洗）をそれぞれ採取して、植物体内運命試験が実施された。

各試料中の放射能分布及び代謝物は表 5 に示されている。

最終収穫期の水稻の残留放射能濃度は根部で高く、稲わら、玄米及びもみ殻に大きな差は認められなかった。

非処理区の玄米及びもみ殻から、処理区での両組織における残留放射能濃度の約 30%に相当する 0.034 及び 0.037 mg/kg の残留放射能が認められ、処理土壌から生成した ¹⁴CO₂ が非処理区の玄米及びもみ殻に取り込まれたと考えられた。

茎葉部及び稲わらのヘキサン/酢酸エチル溶出画分における主要成分は代謝物 C 及び D で、それぞれ 2.63%TRR～2.95%TRR 及び 2.33%TRR～4.24%TRR であり、ほかに未変化の MCPB エチル (0.11%TRR～0.18%TRR) が認められた。

稲わらのメタノール溶出液から分取した画分の酸及び酵素処理により、代謝物 D 及び C が 6.02%TRR (0.0099 mg/kg) 及び 1.87%TRR (0.0031 mg/kg) 認められ、当該区分は代謝物 D 及び C の糖抱合体であると考えられた。玄米抽出物中では代謝物は同定されなかった。（参照 2、6）

表 5 各試料中の放射能分布及び代謝物 (%TRR)

試料	総残留放射能	抽出画分*	ヘキサン / 酢酸エチル抽出				メタノール抽出	非抽出画分
			MCPB エチル	C	D			
茎葉部	100 (0.113)	55.8 (0.0632)	9.37 (0.0106)	0.18 (0.0002)	2.63 (0.0030)	4.24 (0.0048)	28.8 (0.0327)	44.2 (0.0501)
玄米	100 (0.125)	7.08 (0.0088)	4.58 (0.0057)				1.23 (0.0015)	
もみ殻	100 (0.119)							
稲わら	100 (0.164)	46.9 (0.0767)	7.94 (0.0130)	0.11 (0.0002)	2.95 (0.0048)	2.33 (0.0038)	24.2 (0.0395)	53.1 (0.0868)

根部 (水洗)	100 (4.47)							
------------	---------------	--	--	--	--	--	--	--

*: ヘキサン/酢酸エチル抽出+アセトニトリル/水抽出+ソックスレー抽出
() : mg/kg、/ : 分析せず

(2) ネーブルオレンジ

ネーブルオレンジ (品種: Atwood) に ^{14}C -MCPB エチルを最終収穫 49 日前に 55.9 mg/樹及び最終収穫 21 日前に 54.8 mg/樹の用量で葉面散布し、果実を最終処理 0、7 及び 21 日後、葉部を最終処理 21 日後に採取して、植物体内運命試験が実施された。

果実中の放射能分布は表 6 に、葉中の放射能分布は表 7 に、果実及び葉の表面洗浄液、果実並びに葉中の代謝物は表 8 に示されている。

果実における総残留放射能濃度は 0.159~0.303 mg/kg であり、大部分の放射能は果皮に分布し、果肉では少量検出された。葉における総残留放射能濃度は 5.71 mg/kg で、表面洗浄液及び抽出性画分に大部分の放射能 (87.4%TRR) が認められた。

未変化の MCPB エチルは果実の表面洗浄液に 0.1%TRR 未満~1.0%TRR (0.001 未満~0.003 mg/kg)、果皮に 1.3%TRR (0.004 mg/kg)、葉部に 0.5%TRR (0.030 mg/kg) 認められた。

果肉における主要成分は代謝物 C で、1.1%TRR~2.3%TRR (0.003~0.004 mg/kg) 認められた。果皮における主な代謝物は C 及び C の抱合体で合計 35.2%TRR~63.8%TRR (0.107~0.156 mg/kg) 認められ、ほかに代謝物 B 及び G が最大 12.1%TRR (0.037 mg/kg) 及び 19.4%TRR (0.059 mg/kg) 認められた。そのほか代謝物 D の抱合体並びに代謝物 E 及び H が認められた。

葉における表面洗浄液中の主要成分は代謝物 B で 9.4%TRR (0.536 mg/kg)、ほかに代謝物 C 及び H が認められた。葉の主要代謝物は G で 33.0%TRR (1.88 mg/kg)、ほかに B、C、E 及び H 並びに C 及び D の抱合体が認められた。(参照 2、6)

表 6 果実中の放射能分布

処理後 日数(日)	表面洗浄液		果肉		果皮		非抽出	
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
0	0.012	4.0	0.015	5.1	0.264	86.9	0.012	4.0
7	0.003	1.7	0.014	8.5	0.136	85.5	0.007	4.3
21	0.002	0.6	0.020	7.7	0.231	87.7	0.011	3.9

表 7 葉中の放射能分布

処理後 日数(日)	表面洗浄液		抽出		非抽出	
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR

21	1.09	19.1	3.90	68.3	0.716	12.5
----	------	------	------	------	-------	------

1

2

表 8 果実及び葉の表面洗浄液、果実並びに葉中の代謝物 (%TRR)

処理後 日数 (日)	試料	MCPB エチル	B	C	C 抱合体	D 抱合体	E	G	H
0	果実 (表面洗浄液)	1.0 (0.003)	1.8 (0.005)	ND	ND	ND	ND	ND	0.1 (<0.001)
	果肉	ND	ND	1.1 (0.003)	ND	ND	ND	ND	ND
	果皮	1.3 (0.004)	12.1 (0.037)	15.8 (0.048)	19.4 (0.059)	7.6 (0.023)	6.6 (0.020)	19.4 (0.059)	ND
7	果実 (表面洗浄液)	0.1 (<0.001)	0.7 (0.001)	0.1 (<0.001)	ND	ND	ND	ND	0.4 (0.001)
	果肉	ND	ND	2.3 (0.004)	ND	ND	ND	ND	ND
	果皮	ND	4.0 (0.006)	31.9 (0.051)	31.9 (0.051)	4.1 (0.007)	2.4 (0.004)	5.0 (0.008)	ND
21	果実 (表面洗浄液)	<0.1 (<0.001)	0.3 (0.001)	ND	ND	ND	ND	ND	0.1 (<0.001)
	果肉	ND	ND	1.6 (0.004)	ND	ND	ND	ND	ND
	果皮	ND	3.9 (0.010)	19.2 (0.051)	39.7 (0.105)	2.5 (0.007)	3.6 (0.009)	7.9 (0.021)	ND
	葉 (表面洗浄液)	0.5 (0.030)	9.4 (0.536)	0.5 (0.030)	ND	ND	ND	ND	4.3 (0.247)
	葉	ND	4.5 (0.259)	3.3 (0.187)	4.4 (0.253)	4.5 (0.257)	7.4 (0.419)	33.0 (1.88)	8.7 (0.495)

3

注：果実及び葉中の代謝物の放射能濃度は各抽出画分の合計を示す。

4

() : mg/kg

5

ND : 検出せず

6

7 (3) りんご

8

りんご (品種 : Granny Smith) に ^{14}C -MCPB エチルを 56.2 mg/樹の用量で最終収穫 28 日前に葉面散布し、果実を処理 0、14 及び 28 日後に、葉部を処理 28 日後に採取して、植物体内運命試験が実施された。

10

11

りんご果実中の放射能分布は表 9 に、葉中の放射能分布は表 10 に、果実の表面洗浄液、ジュース、搾りかす、葉の表面洗浄液及び葉中の代謝物は表 11 に示されている。

12

13

14

果実における総残留放射能濃度は 0.0731~0.0897 mg/kg であり、ジュース画分に 23.2%TRR~56.4%TRR、搾りかす画分に 41.7%TRR~68.7%TRR 認めら

15

1 れた。

2 果実の表面洗浄液の主要成分は未変化の MCPB エチルで、1.54%TRR～
3 7.26%TRR (0.0011～0.0065 mg/kg) 認められた。代謝物として B 及び C が認
4 められたが、いずれも 1%TRR 未満であった。

5 搾りかすにおける処理 0 日後の主要代謝物は C で 46.8%TRR (0.0419 mg/kg)、
6 14 及び 28 日後には E のβ-グルコシド抱合体が最大 14.3%TRR (0.0104 mg/kg)、
7 H のβ-グルコシド抱合体が最大 10.2%TRR (0.0079 mg/kg) 認められた。ほかに
8 未変化の MCPB エチル並びに代謝物 B 及び D のβ-グルコシド抱合体が認められ
9 たが、いずれも 10%TRR 未満であった。

10 ジュースにおける処理 0 日後の主要代謝物は C で 12.2%TRR (0.0109 mg/kg)
11 であった。14 及び 28 日後に、代謝物 E のβ-グルコシド抱合体が最大 24.1%TRR
12 (0.0187 mg/kg)、代謝物 D のβ-グルコシド抱合体が最大 12.7%TRR (0.0098
13 mg/kg)、代謝物 H のβ-グルコシド抱合体が最大 13.5%TRR (0.0105 mg/kg)
14 認められた。ほかに、未変化の MCPB エチル及び代謝物 B が認められたが、い
15 ずれも 2%TRR 未満であった。

16 処理 28 日後において葉の総残留放射能は 3.85 mg/kg 認められ、表面洗浄液中
17 の主要成分は未変化の MCPB エチルで 8.31%TRR (0.320 mg/kg) であった。
18 葉の主要成分として代謝物 D のβ-グルコシド抱合体が 45.7%TRR (1.76 mg/kg)、
19 代謝物 E のβ-グルコシド抱合体が 21.9%TRR (0.844 mg/kg) 認められ、ほかに
20 代謝物 B、C 及び H のβ-グルコシド抱合体が認められたが、いずれも 1%TRR 未
21 満であった。(参照 2、6)

22
23 表 9 りんご果実中の放射能分布

処理後 日数(日)	表面洗浄液		ジュース		搾りかす			
					抽出		非抽出	
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
0	0.0072	8.08	0.0208	23.2	0.0540	60.3	0.0076	8.44
14	0.0016	2.05	0.0411	53.1	0.0320	41.4	0.0027	3.51
28	0.0014	1.96	0.0412	56.4	0.0283	38.7	0.0021	2.94

24
25 表 10 葉中の放射能分布

処理後 日数(日)	表面洗浄液		葉			
			抽出		非抽出	
	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR	mg/kg	%TRR
28	0.512	13.3	3.07	79.8	0.268	6.95

26
27 表 11 果実の表面洗浄液、ジュース、搾りかす、葉表面洗浄液及び葉中の代謝物(%TRR)

処理後 日数(日)	試料	MCPB エチル	B	C	D 抱合体	E 抱合体	H 抱合体

0	果実 (表面洗浄液)	7.26 (0.0065)	0.23 (0.0002)	0.07 (0.0001)	ND	ND	ND
	搾りかす	6.03 (0.0054)	1.98 (0.0018)	46.8 (0.0419)	0.32 (0.0003)	0.74 (0.0007)	ND
	ジュース	1.08 (0.0010)	1.29 (0.0012)	12.2 (0.0109)	3.35 (0.0030)	2.69 (0.0024)	ND
14	果実 (表面洗浄液)	1.54 (0.0012)	0.23 (0.0002)	0.08 (0.0001)	ND	ND	ND
	搾りかす	0.51 (0.0004)	0.36 (0.0003)	2.00 (0.0015)	7.44 (0.0058)	12.4 (0.0096)	10.2 (0.0079)
	ジュース	ND	1.27 (0.0010)	1.20 (0.0009)	12.7 (0.0098)	24.1 (0.0187)	13.5 (0.0105)
28	果実 (表面洗浄液)	1.56 (0.0011)	0.10 (0.0001)	0.12 (0.0001)	ND	ND	ND
	搾りかす	ND	ND	ND	7.52 (0.0055)	14.3 (0.0104)	9.53 (0.0070)
	ジュース	1.26 (0.0009)	ND	1.90 (0.0014)	12.5 (0.0091)	20.7 (0.0151)	11.2 (0.0082)
	葉 (表面洗浄液)	8.31 (0.320)	2.46 (0.0947)	0.92 (0.0354)	ND	ND	ND
	葉	0.76 (0.0292)	0.85 (0.0329)	0.95 (0.0365)	45.7 (1.76)	21.9 (0.844)	0.08 (0.0031)

(): mg/kg ND : 検出せず

MCPB エチルの植物体内における主要代謝経路は、①エステル結合の加水分解による代謝物 B の生成、②代謝物 B のβ-酸化による代謝物 C の生成及び③代謝物 C の加水分解による代謝物 D の生成であり、ほかに代謝物 B のメチル基の水酸化による代謝物 G の生成、代謝物 C のメチル基の水酸化による代謝物 E の生成、代謝物 B の側鎖の水酸化による代謝物 H の生成、さらにβ-グルコシドによる代謝物 C、D、E 又は H の抱合体の生成が考えられた。

3. 土壌中運命試験

(1) 好氣的湛水土壌中運命試験

非滅菌又は滅菌軽埴土に湛水し、¹⁴C-MCPB エチルを 0.322 mg/kg 乾土となるように添加し、25±2℃の暗所条件下、二酸化炭素を含まない加湿空気を通気し、非滅菌土壌では最長 180 日間、滅菌土壌では最長 28 日間インキュベートし、好氣的湛水土壌中運命試験が実施された。

各試料中の残留放射能分布は表 12 に、水層及び土壌中分解物は表 13 に、MCPB エチル及び分解物の推定半減期は表 14 に示されている。

非滅菌土壌において、水層では、処理 0 日後に未変化の MCPB エチルが

1 99.4%TAR (0.320 mg/kg) 認められたが、1日後には0.6%TAR (0.002 mg/kg)
 2 に減少した。主要分解物として、Bが最大61.7%TAR (0.198 mg/kg)、Cが最
 3 大16.5%TAR (0.053 mg/kg) 認められ、ほかに分解物D及びLが認められたが、
 4 いずれも1%TAR未満であった。土壌中では、未変化のMCPBエチルは処理7
 5 日後に最大0.8%TAR (0.003 mg/kg) であり、14日後には0.2%TAR (0.001 mg/kg
 6 未満)となった。土壌中の主要分解物として、Bが最大27.3%TAR (0.088 mg/kg)、
 7 Cが最大15.9%TAR (0.051 mg/kg)、Dが最大28.8%TAR (0.093 mg/kg)、L
 8 が最大12.7%TAR (0.041 mg/kg) 認められた。処理180日後に¹⁴CO₂が
 9 36.3%TAR (0.117 mg/kg) 認められた。

10 滅菌湛水土壌において、水層では、未変化のMCPBエチルは処理0日後に
 11 90.7%TAR (0.292 mg/kg) であったが、処理28日後には検出されなかった。主
 12 要分解物として、Bが最大10.4%TAR (0.033 mg/kg)、Cが最大10.0%TAR (0.032
 13 mg/kg) 認められた。土壌中では、未変化のMCPBエチルが最大61.3%TAR (0.197
 14 mg/kg) 認められたが、28日後には9.1%TAR (0.029 mg/kg) に減少した。主
 15 要分解物として、Bが最大17.6%TAR (0.057 mg/kg)、Cが最大18.6%TAR (0.060
 16 mg/kg) 認められた。

17 MCPBエチルの好氣的湛水土壌における推定分解経路は、加水分解による分
 18 解物Bの生成、分解物Bのβ-酸化又は分解物J及びLを経由した分解物Cの生
 19 成、分解物Cの側鎖の開裂によるDの生成であると考えられた。(参照2、6)
 20
 21

表12 各試料中の残留放射能分布

滅菌/ 非滅菌	処理後 日数 (日)	水層		土壌抽出性		¹⁴ CO ₂		土壌非抽出性	
		mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR
非滅菌	0	0.330	102	/	/	/	/	0.005	1.6
	0.125	0.282	87.8	0.032	10.1	/	/	0.009	2.8
	1	0.231	71.9	0.081	25.2	0.001	0.4	0.014	4.5
	7	0.116	36.1	0.163	50.6	0.008	2.4	0.032	10.1
	14	0.072	22.3	0.186	57.7	0.017	5.3	0.039	12.1
	28	0.041	12.7	0.180	56.1	0.038	11.9	0.056	17.4
	60	0.005	1.4	0.168	52.2	0.084	26.0	0.053	16.5
	90	0.002	0.5	0.120	37.2	0.096	29.8	0.090	28.1
	120	0.002	0.5	0.134	41.6	0.103	32.1	0.068	21.2
180	0.002	0.8	0.098	30.4	0.117	36.3	0.082	25.4	
滅菌	0	0.298	92.6	0.028	8.8	/	/	0.005	1.5
	7	0.050	15.6	0.248	77.1	/	/	0.015	4.8
	28	0.062	19.2	0.226	70.3	/	/	0.010	3.1

22 / : 該当なし
 23

1

表13 水層及び土壌中分解物

滅菌/ 非滅菌	試料	処理 後日 数 (日)	MCPB エチル		B		C		D		L	
			mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR
非滅菌	水層	0	0.320	99.4	0.002	0.7	ND	ND	ND	ND	ND	ND
		0.125	0.073	22.7	0.198	61.7	0.004	1.3	ND	ND	ND	ND
		1	0.002	0.6	0.191	59.4	0.025	7.7	ND	ND	ND	ND
		7	ND	ND	0.057	17.7	0.053	16.5	0.001	0.3	ND	ND
		14	ND	ND	0.018	5.5	0.046	14.4	0.002	0.5	ND	ND
		28	ND	ND	0.003	1.1	0.031	9.5	0.002	0.5	0.002	0.7
		60	ND	ND	ND	ND	<0.001	0.1	0.001	0.2	ND	ND
		90	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND
	土壌	0	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
		0.125	0.002	0.5	0.027	8.3	0.003	0.9	ND	ND	ND	ND
		1	ND	ND	0.059	18.4	0.015	4.8	0.002	0.5	ND	ND
		7	0.003	0.8	0.088	27.3	0.040	12.5	0.028	8.6	ND	ND
		14	<0.001	0.2	0.068	21.3	0.051	15.9	0.054	16.9	0.007	2.1
		28	ND	ND	0.043	13.3	0.040	12.4	0.073	22.7	0.016	4.8
		60	ND	ND	0.010	3.1	0.005	1.6	0.093	28.8	0.041	12.7
		90	ND	ND	0.005	1.5	0.003	1.0	0.061	18.9	0.037	11.5
		120	ND	ND	0.007	2.2	0.002	0.7	0.069	21.3	0.035	11.0
		180	ND	ND	0.005	1.5	0.003	0.9	0.055	17.0	0.021	6.6
滅菌	水層	0	0.292	90.7	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
		7	0.015	4.6	0.033	10.4	ND	ND	ND	ND	ND	
		28	ND	ND	0.005	1.5	0.032	10.0	ND	ND	ND	
	土壌	0	0.028	8.8	ND	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
		7	0.197	61.3	0.046	14.3	ND	ND	ND	ND	ND	
		28	0.029	9.1	0.057	17.6	0.060	18.6	ND	ND	ND	

/ : 該当なし、ND : 検出せず

2

3

4

表14 推定半減期

試料	推定半減期	
	非滅菌好氣的湛水土壌	MCPB エチル
B		31.6 日
C		18.2 日
D		267 日
L		81 日
滅菌好氣的湛水土壌	MCPB エチル	7.9 日

5

1 (2) 好氣的土壤中運命試験

2 非滅菌又は滅菌砂壤土に、¹⁴C-MCPB エチルを 0.432 mg/kg 乾土となるように
3 添加し、25±2℃の暗所条件下に、二酸化炭素を含まない加湿空気を通気し、非
4 滅菌土壌では最長 60 日間、滅菌土壌では最長 30 日間インキュベートし、好氣的
5 土壌中運命試験が実施された。

6 各試料中の残留放射能分布は表 15 に、土壌中分解物は表 16 に、MCPB エチ
7 ル及び分解物の推定半減期は表 17 に示されている。

8 非滅菌土壌において、処理 0 日後に未変化の MCPB エチルが 91.7%TAR (0.396
9 mg/kg) 認められたが、1 日後には 0.1%TAR (0.001 mg/kg) に減少した。主要
10 分解物として、B が最大 71.1%TAR (0.307 mg/kg)、C が最大 29.4%TAR (0.127
11 mg/kg) 認められ、ほかに分解物 D が最大 2.0%TAR (0.009 mg/kg) 認められ
12 た。処理 60 日後に ¹⁴CO₂ が 65.3%TAR (0.282 mg/kg) 認められた。

13 滅菌土壌において、未変化の MCPB エチルは処理 0 日後に 94.4%TAR (0.408
14 mg/kg) であったが、処理 30 日後には 14.6%TAR (0.063 mg/kg) に減少した。
15 主要分解物として、B が最大 78.0%TAR (0.337 mg/kg) 認められた。

16 MCPB エチルの好氣的土壌における推定分解経路は、加水分解による分解物 B
17 の生成、β-酸化による分解物 C の生成、さらに二酸化炭素への無機化であると考
18 えられた。(参照 2、6)

21 表 15 各試料中の残留放射能分布

滅菌/ 非滅菌	処理後 日数(日)	抽出		¹⁴ CO ₂		揮発性有機物		非抽出	
		mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR
非滅菌	0	0.412	95.4	/	/	/	/	0.014	3.2
	0.125	0.389	90.0	/	/	/	/	0.024	5.6
	1	0.270	62.6	0.067	15.6	<0.001	<0.1	0.095	22.0
	3	0.120	27.8	0.141	32.6	<0.001	<0.1	0.138	32.0
	7	0.078	18.1	0.174	40.2	<0.001	0.1	0.180	41.6
	14	0.065	15.0	0.221	51.1	<0.001	0.1	0.130	30.0
	30	0.045	10.5	0.265	61.3	<0.001	0.1	0.107	24.8
	60	0.043	10.0	0.282	65.3	<0.001	0.1	0.127	29.5
滅菌	0	0.418	96.8	/	/	/	/	0.010	2.2
	3	0.414	95.9	/	/	/	/	0.011	2.6
	7	0.413	95.7	/	/	/	/	0.005	1.2
	30	0.403	93.4	/	/	/	/	0.016	3.8

22 / : 該当なし

23 表 16 土壌中分解物

滅菌/	処理後	MCPB エチル	B	C	D
-----	-----	----------	---	---	---

非滅菌	日数 (日)	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR	mg/kg	%TAR
非滅菌	0	0.396	91.7	0.008	1.7	ND	ND	ND	ND
	0.125	0.021	4.8	0.307	71.1	0.032	7.4	0.007	1.5
	1	0.001	0.1	0.099	23.0	0.127	29.4	0.009	2.0
	3	<0.001	0.1	0.014	3.3	0.083	19.3	0.006	1.4
	7	ND	ND	0.011	2.7	0.031	7.1	0.004	0.9
	14	ND	ND	0.005	1.2	0.011	2.6	0.001	0.2
	30	ND	ND	0.007	1.5	0.003	0.8	ND	ND
	60	0.001	0.3	0.004	0.9	ND	ND	ND	ND
滅菌	0	0.408	94.4	0.002	0.4	ND	ND	ND	ND
	3	0.247	57.2	0.161	37.2	ND	ND	ND	ND
	7	0.181	42.0	0.211	48.9	ND	ND	ND	ND
	30	0.063	14.6	0.337	78.0	ND	ND	ND	ND

ND：検出せず

表 17 推定半減期

試料	推定半減期	
	非滅菌好氣的土壌	MCPB エチル
B		15.9 時間
C		3.7 日
D		6.1 日
滅菌好氣的土壌	MCPB エチル	12.0 日

(3) 土壌吸着試験（分解物 B）

4 種類の土壌 [軽埴土（宮城、新潟及び茨城）及び砂壤土（宮崎）] に分解物 B を添加して、土壌吸着試験が実施された。

Freundlich の吸着係数 K_F^{ads} は 13.7～59.6、有機炭素含有率で補正した吸着係数 $K_F^{ads}_{oc}$ は 527～2,070 であった。（参照 2、6）

4. 水中運命試験

(1) 加水分解試験①

pH 7.0（リン酸緩衝液）又は pH 9.0（ホウ酸緩衝液）の各滅菌緩衝液に ^{14}C -MCPB エチルを 1.01 mg/L となるように添加し、暗所条件下、 $25 \pm 1^\circ C$ で最長 30 日間インキュベートして、加水分解試験が実施された。

分解物の放射能濃度は表 18 に、MCPB エチルの推定半減期は表 19 に示されている。

pH 7.0 緩衝液中で未変化の MCPB エチルは処理 0 日の 99.7%TAR (1.01 mg/L) から 30 日後に 92.8%TAR (0.941 mg/L) に減少し、主要分解物として B が最大 4.0%TAR (0.041 mg/L) 認められた。

1 pH 9.0 緩衝液中で未変化の MCPB エチルは処理 0 日の 97.8%TAR (0.992
2 mg/L) から 30 日後には 1.1%TAR (0.011 mg/L) に減少した。主要分解物は B
3 で最大 103%TAR (1.04 mg/L) 認められた。

4 MCPB エチルは pH 7.0 で緩やかに、pH 9.0 で速やかに非生物的に分解される
5 と考えられた。

6 MCPB エチルの緩衝液中における主要分解経路は側鎖の開裂であると考えら
7 れた。（参照 2、6）
8
9

表 18 分解物の放射能濃度

緩衝液	処理後 日数	MCPB エチル		B	
		mg/L	%TAR	mg/L	%TAR
pH 7.0	0	1.01	99.7	ND	ND
	1	0.945	93.2	0.005	0.5
	3	0.977	96.4	0.001	0.1
	7	0.974	96.1	0.012	1.2
	14	0.955	94.2	0.021	2.1
	21	0.959	94.6	0.028	2.8
	30	0.941	92.8	0.041	4.0
pH 9.0	0	0.992	97.8	0.016	1.6
	1	0.828	81.7	0.154	15.2
	3	0.636	62.8	0.389	38.4
	7	0.327	32.2	0.709	70.0
	14	0.104	10.3	0.951	93.8
	21	0.036	3.6	1.03	101
	30	0.011	1.1	1.04	103

10 ND：検出せず
11
12

表 19 MCPB エチルの推定半減期

試験温度(°C)	推定半減期(日)	
	pH 7.0	pH 9.0
25±1	533	4.5

13
14 **(2) 加水分解試験②**

15 pH 1.2 (塩化カリウム-塩酸緩衝液)、pH 4.0 (クエン酸緩衝液)、pH 7.0
16 (リン酸緩衝液) 又は pH 9.0 (ホウ酸緩衝液) の各滅菌緩衝液に非標識 MCPB
17 エチルを 1 mg/L となるように添加し、暗所条件下、pH 1.2 では 37±1°C で 2 日
18 間、pH 4.0 及び pH 7.0 では 25±1°C 及び 40±1°C で 60 日間、pH 9.0 では 25±
19 1°C で 21 日間及び 40±1°C で 3 日間インキュベートして、加水分解試験が実施さ
20 れた。

21 MCPB エチルの推定半減期は表 20 に示されている。

25℃において、pH 9.0 で未変化の MCPB エチルが減少し、分解物 B が顕著に増加した。pH 7.0 では分解物 B は僅かに生成され、pH 4.0 では分解物 B は検出されなかった。40℃において、分解物 B の検出量は pH 9.0、pH 7.0、pH 4.0 の順に減少した。37℃において、pH 1.2 で時間経過とともに分解物 B が増加した。分解物 C はいずれの条件下においても認められなかった。(参照 2、6)

表 20 MCPB エチルの推定半減期

試験温度	pH 1.2	pH 4.0	pH 7.0	pH 9.0
25℃	/	1年以上	340日	9.1日
37℃	19時間	/	/	/
40℃	/	200日	84日	35時間

/ : 該当なし

(3) 水中光分解試験①

滅菌自然水(湖水、pH 6.9)又は滅菌緩衝液(酢酸緩衝液、pH 4.0)に ^{14}C -MCPB エチルを 0.968~1.07 mg/L となるように添加し、無菌条件下、 $25\pm 2^\circ\text{C}$ で最長 11 日間、キセノンランプ光(光強度: 22.8 W/m²、波長: 290 nm 以下をカット)を照射して、水中光分解試験が実施された。なお、暗所対照区が設けられた。

水中の光分解物の放射能濃度は表 21 に、推定半減期は表 22 に示されている。

光照射区において、滅菌自然水中で未変化の MCPB エチルは処理 1 日後に 4.7% TAR (0.050 mg/L) に減少した。主要分解物として、M 及び N が最大で 43.4% TAR (0.457 mg/L) 及び 16.2% TAR (0.171 mg/L) 認められ、ほかに分解物 O が最大 7.7% TAR (0.081 mg/L) 認められた。滅菌緩衝液で未変化の MCPB エチルは 3 日後に 0.2% TAR (0.002 mg/L) に減少し、主要分解物として、M 及び N がそれぞれ最大で 61.6% TAR (0.649 mg/L) 及び 20.2% TAR (0.213 mg/L) 認められた。

光照射区の滅菌自然水及び緩衝液で、 $^{14}\text{CO}_2$ がそれぞれ 21.4% TAR (0.226 mg/L) 及び 22.7% TAR (0.239 mg/L) 認められ、揮発性有機化合物が僅かに認められた (0.1% TAR~0.4% TAR)。

暗所対照区においては、滅菌自然水中で未変化の MCPB エチルは 11 日後には 0.1% TAR (0.001 mg/L) に減少し、主要分解物として B が最大 94.9% TAR (1.00 mg/L) 認められた。滅菌緩衝液中では、未変化の MCPB エチルは 11 日後に 90.7% TAR (0.956 mg/L) に減少し、分解物 B が最大 1.0% TAR (0.010 mg/L) 認められた。

MCPB エチルの推定水中光分解経路は、フェニル環の脱塩素及び水酸化による分解物 M の生成、フェニル環の水酸化による 3 水酸化光分解による分解物 N の生成及び 4 水酸化光分解による分解物 O の生成、さらに CO_2 への分解であると考えられた。(参照 2、6)

1
2

表 21 水中の光分解物の放射能濃度

試験区	試料	処理後日数 (日)	MCPB エチル		分解物									
					B		M		N		O		¹⁴ CO ₂	
			mg/L	%TAR	mg/L	%TAR	mg/L	%TAR	mg/L	%TAR	mg/L	%TAR	mg/L	%TAR
光照射区	滅菌自然水	0	1.04	98.3	/	/	ND	ND	ND	ND	ND	ND	/	/
		0.08	0.714	67.7	/	/	0.255	24.2	ND	ND	ND	ND	/	/
		0.17	0.541	51.3	/	/	0.431	40.9	<0.001	ND	ND	ND	/	/
		0.33	0.398	37.8	/	/	0.457	43.4	0.022	2.1	0.023	2.2	/	/
		1	0.050	4.7	/	/	0.320	30.3	0.171	16.2	0.081	7.7	0.005	0.5
		3	ND	ND	/	/	0.046	4.3	0.170	16.1	0.045	4.3	0.126	12.0
	11	ND	ND	/	/	ND	ND	0.154	14.6	ND	ND	0.226	21.4	
	滅菌緩衝液	0	0.994	94.3	/	/	ND	ND	ND	ND	ND	ND	/	/
		0.08	0.728	69.1	/	/	0.282	26.8	ND	ND	ND	ND	/	/
		0.17	0.480	45.6	/	/	0.508	48.2	0.003	0.2	ND	ND	/	/
		0.33	0.335	31.8	/	/	0.616	58.4	0.015	1.4	ND	ND	/	/
		1	0.036	3.4	/	/	0.649	61.6	0.077	7.3	ND	ND	0.016	1.5
3		0.002	0.2	/	/	0.317	30.1	0.185	17.5	ND	ND	0.098	9.3	
11	ND	ND	/	/	ND	ND	0.213	20.2	ND	ND	0.239	22.7		
暗所対照区	滅菌自然水	0	1.04	98.3	0.002	0.2	/	/	/	/	/	/	/	/
		0.08	0.865	82.1	0.097	9.2	/	/	/	/	/	/	/	/
		0.17	0.854	81.0	0.118	11.2	/	/	/	/	/	/	/	/
		0.33	0.744	70.6	0.233	22.1	/	/	/	/	/	/	/	/
		1	0.413	39.2	0.568	53.9	/	/	/	/	/	/	/	/
		3	0.052	5.0	0.946	89.8	/	/	/	/	/	/	/	/
	11	0.001	0.1	1.00	94.9	/	/	/	/	/	/	/	/	
	滅菌緩衝液	0	0.994	94.3	0.004	0.4	/	/	/	/	/	/	/	/
		0.08	1.01	95.7	0.002	0.2	/	/	/	/	/	/	/	/
		0.17	1.01	96.2	0.000	ND	/	/	/	/	/	/	/	/
		0.33	0.987	93.6	0.002	0.2	/	/	/	/	/	/	/	/
		1	1.03	97.9	0.000	ND	/	/	/	/	/	/	/	/
3		0.999	94.8	0.008	0.7	/	/	/	/	/	/	/	/	
11	0.956	90.7	0.010	1.0	/	/	/	/	/	/	/	/		

3 / : 該当なし、ND : 検出せず

4
5

表 22 MCPB エチルの推定半減期 (日)

試験条件	試料	キセノン光	北緯 35° 春*
光照射区	滅菌自然水	0.23	0.67
	滅菌緩衝液	0.20	0.59
暗所対照区	滅菌自然水	0.71	/

	滅菌緩衝液	151	
--	-------	-----	--

*：東京春における太陽光に換算

／：該当なし

（４）水中光分解試験②

自然水（河川水、埼玉）又は滅菌精製水に非標識 MCPB エチルを 1 mg/L となるように添加し、 $25 \pm 2^\circ\text{C}$ で最長 8 時間、キセノンランプ光（光強度： 36.4 W/m^2 、波長：290 nm 以下をカット）を照射して、水中光分解試験が実施された。なお、自然水で最長 32 時間、滅菌精製水で最長 7 日間の暗所対照区が設けられた。

MCPB エチルの推定半減期は表 23 に示されている。

光照射区において、自然水及び滅菌精製水中で未変化の MCPB エチルは急速に分解した。暗所対照区においては、未変化の MCPB エチルは自然水中では時間経過とともに分解し、滅菌精製水中では試験期間中の分解率は 15% 以下であった。

暗所対照区の自然水において分解物 B が認められたが、光照射区の自然水及び滅菌精製水並びに暗所対照区の滅菌精製水では検出されなかった。

分解物 C はいずれの条件下においても検出されなかった。（参照 2、6）

表 23 MCPB エチルの推定半減期

試料	光照射区	暗所対照区
自然水	4.2 時間	17 時間
滅菌精製水	4.3 時間	1 年以上

5. 土壌残留試験

火山灰土・埴壤土（栃木）、洪積土・埴壤土（大阪）、沖積土・埴壤土（埼玉）、火山灰土・壤土（栃木）、沖積土・壤土（神奈川）及び火山灰土・軽埴土（茨城）を用いて MCPB エチル並びに分解物 B 及び C を分析対象化合物とした土壌残留試験が実施された。

結果は表 24 に示されている。（参照 2、6）

表 24 土壌残留試験成績

試験	濃度	土壌	推定半減期	
			MCPB エチル	MCPB エチル +B+C
ほ場試験	400 g ai/ha ^a (2 回散布)	火山灰土・埴壤土	1 日以内	1 日以内
		洪積土・埴壤土	1 日以内	1 日以内
	畑地①	10.8 g ai/ha ^b (2 回散布)	火山灰土・壤土	1 日以内

		18 g ai/ha ^b (2 回散布)	沖積土・壤土	1 日以内	1 日以内
	畑地②	6,000 g ai/ha ^c (1 回散布)	火山灰土・軽埴土	1 日以内	2.1 日
			洪積土・埴壤土	1 日以内	9.9 日
容器 内 試 験	水田状態	0.4 mg/kg 乾土 (1 回)	沖積土・埴壤土	1 日以内	8.1 日
			火山灰土・埴壤土	1 日以内	2.6 日
	畑水分状態①	0.2 mg/kg 乾土 (1 回)	火山灰土・壤土	1 日以内	4.1 日
			沖積土・壤土	1 日以内	4.1 日
	畑水分状態②	6 mg/kg 乾土 (1 回)	火山灰土・軽埴土	1 日以内	2.0 日
			洪積土・埴壤土	1 日以内	1.5 日

a : 1.0%粒剤、b : 20%乳剤、c : 10%液剤、容器内試験は標準品を用いた。

6. 作物残留試験

水稻及び果実を用いて、MCPB エチル並びに代謝物 B 及び C を分析対象化合物とした作物残留試験が実施された。

結果は別紙 3 に示されている。

MCPB エチル及び代謝物 B の含量の最大残留値は、散布 10 日後に収穫した温州みかん（果皮）の 0.93 mg/kg、代謝物 C の最大残留値は、散布 10 日後に収穫した温州みかん（果皮）の 0.69 mg/kg であった。（参照 2、6）

7. 一般薬理試験

MCPB エチルのラット、マウス及びモルモットを用いた一般薬理試験が実施された。

結果は表 25 に示されている。（参照 2、6）

表 25 一般薬理試験

試験の種類	動物種	動物数 /群	投与量 (mg/kg 体重) (投与経路)	最大 無作用量 (mg/kg 体重)	最小 作用量 (mg/kg 体重)	結果の概要	
中枢 神経 系	運動 協調性	ICR マウス	雄 10	0、125、500、 2,000 ^a (経口)	500	2,000	2,000 mg/kg 体重：投与 0.5 時間後に 7 例、1 時間後に 8 例、2～5 時間後に 9 例落下。
	自発運動	ICR マウス	雄 9～ 12	0、31.3、125、 500 ^a (経口)	125	500	500 mg/kg 体重：自発運動量の減少
	麻酔延長 作用	ICR マウス	雄 11 ～12	0、31.3、125、 500 ^a (経口)	125	500	500 mg/kg 体重：麻酔時間が 2.4 倍に延長

	体温への影響	Wistar ラット	雄 7~8	0, 31.3, 125, 500 ^a (経口)	125	500	500 mg/kg 体重 : 体温の低下、歩行異常
自律神経系	摘出回腸 (直接作用)	Hartley モルモット	雄 3~5	1×10 ⁻⁸ , 1×10 ⁻⁷ , 1×10 ⁻⁶ , 1×10 ⁻⁵ , 1×10 ⁻⁴ g/mL ^b (<i>in vitro</i>)	1×10 ⁻⁷ (g/mL)	1×10 ⁻⁶ (g/mL)	摘出回腸の収縮 (アトロピンで抑制されず、ジフェンヒドラミンで抑制)
	摘出回腸 (Ach 及び His に対する作用)	Hartley モルモット	雄 3~5	1×10 ⁻⁸ , 1×10 ⁻⁷ , 1×10 ⁻⁶ , 1×10 ⁻⁵ , 1×10 ⁻⁴ g/mL ^b (<i>in vitro</i>)	1×10 ⁻⁶ (g/mL)	1×10 ⁻⁵ (g/mL)	Ach 及び His による収縮の抑制
骨格筋	坐骨神経及び腓腹筋	Wistar ラット	雄 3~4	31.3, 125 ^c (<i>ex vivo</i>) (腹腔内投与)	31.3	125	腓腹筋の収縮抑制

1 溶媒として、^a : 0.5%CMC-Na、^b : sorpol 1200 含有 Tyrode 液、^c : sorpol 1200 含有生理食塩液が
2 用いられた。

4 8. 急性毒性試験

5 MCPB エチル (原体) を用いた急性毒性試験が実施された。

6 結果は表 26 に示されている。(参照 2、6)

8 表 26 急性毒性試験概要 (原体)

投与経路	動物種	LD ₅₀ (mg/kg 体重)		観察された症状
		雄	雌	
経口	Wistar ラット ^a 雌雄各 10 匹	1,570	1,400	投与量 : 1,050, 1,310, 1,640, 2,050, 2,560, 3,200(雄のみ) mg/kg 体重 雌雄 : 1,050 mg/kg 体重以上で鎮静後脱力、昏迷、昏睡及び音に対する驚愕反射 雌雄 : 1,310 mg/kg 体重以上で死亡例
	SD ラット ^b 雌雄各 10 匹			1,780
	ddY マウス ^a 雌雄各 10 匹	1,160	1,550	雄 : 833, 1,000, 1,200, 1,440 雌 : 830, 1,000, 1,200, 1,440, 1,720、

				2,070、2,490 mg/kg 体重 雄：833 mg/kg 体重以上、雌：830 mg/kg 体重以上で鎮静後脱力、昏迷、昏睡及び音に対する驚愕反射 雌雄：1,000 mg/kg 体重以上で死亡例
経皮	Wistar ラット ^c 雄 10 匹	>4,000	/	鎮静及び立毛 死亡例なし
腹腔内	Wistar ラット ^a 雌雄各 10 匹	870	640	鎮静後脱力、昏迷、昏睡及び音に対する驚愕反射 雄：720 mg/kg 体重以上で死亡例 雌：600 mg/kg 体重以上で死亡例
	ddY マウス ^a 雌雄各 10 匹	525	547	鎮静後脱力、昏迷及び昏睡 雄：538 mg/kg 体重以上で死亡例 雌：591 mg/kg 体重以上で死亡例
皮下	Wistar ラット ^a 雌雄各 10 匹	3,910	4,280	鎮静後脱力、昏迷、昏睡及び音に対する驚愕反射 雌雄：2,560 mg/kg 体重以上で死亡例
	ddY マウス ^a 雌雄各 10 匹	3,550	3,110	鎮静後脱力、昏迷及び昏睡 雄：1,660 mg/kg 体重以上で死亡例 雌：2,100 mg/kg 体重以上で死亡例
吸入	Wistar ラット 雌雄各 5 匹	LC ₅₀ (mg/L)		呼吸数及び呼吸運動異常、鼻及び顎周辺又は全身褐色汚染、被毛のもつれ及び油状外観 雄：死亡例なし 雌：3.24 mg/L 以上で死亡例
		>4.96	3.7	

1 a：コーン油、b：オリーブ油、c：原液

2 /：該当なし

9. 眼・皮膚に対する刺激性及び皮膚感作性試験

5 日本白色種ウサギを用いた眼及び皮膚刺激性試験が実施され、眼及び皮膚刺激性
6 は認められなかった。

7 Dunkin-Hartley モルモットを用いた Maximization 法による皮膚感作性試験が
8 実施され、結果は陰性であった。（参照 2、6）

10. 亜急性毒性試験

(1) 13 週間亜急性毒性試験（ラット）

12 Wistar ラット（一群雌雄各 10 匹）を用いた強制経口（原体：0、5、25、100
13 及び 400 mg/kg 体重/日）投与による 13 週間亜急性毒性試験が実施された。

14 本試験において、400 mg/kg 体重/日投与群の雌雄で体重増加抑制（雄：投与 2
15 週以降、雌：投与 3 週以降）及び肝臓の門脈周囲性細胞浸潤が認められたので、
16 無毒性量は雌雄とも 100 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 2、6）

1 (2) 13週間亜急性毒性試験（マウス）

2 ddY マウス（一群雌雄各 12 匹）を用いた混餌（原体：0、10、50、125 及び
3 500 mg/kg 体重/日）投与による 13 週間亜急性毒性試験が実施された。

4 本試験において、いずれの投与群においても毒性所見が認められなかったので、
5 無毒性量は本試験の最高用量 500 mg/kg 体重/日であると考えられた。（参照 2、
6 6）

7
8 (3) 90日間亜急性毒性試験（イヌ）

9 ビーグル犬（一群雌雄各 4 匹）を用いた混餌（原体：0、100、300 及び 2,000
10 ppm、平均検体摂取量は表 27 参照）投与による 90 日間亜急性毒性試験が実施さ
11 れた。

12
13 表 27 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）の平均検体摂取量

投与群		100 ppm	300 ppm	2,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	2.45	7.47	51.9
	雌	2.70	8.51	55.0

14 各投与群で認められた毒性所見は表 28 に示されている。

15 本試験において、2,000 ppm 投与群の雄で精巣、精巣上体、前立腺絶対及び比
16 重量²減少等が、300 ppm 以上投与群の雌で体重減少等が認められたので、無毒
17 性量は雄で 300 ppm（7.47 mg/kg 体重/日）、雌で 100 ppm（2.70 mg/kg 体重/
18 日）であると考えられた。（参照 2、6）

19
20
21 表 28 90 日間亜急性毒性試験（イヌ）で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
2,000 ppm	<ul style="list-style-type: none"> ・ 体重減少(投与 2 週以降) ・ RBC、Hb 及び Ht 減少 ・ PT 及び APTT 延長 ・ Cre、BUN、AST 及び無機リン増加 ・ クロール減少 ・ 肝絶対及び比重量増加[§] ・ 精巣、精巣上体、前立腺絶対及び比重量減少 ・ 胸腺絶対及び比重量減少[§] ・ 胸腺萎縮(4/4)[§] ・ 骨髓造血亢進(3/4)[§] ・ 肝小葉中心性くもり硝子様変性(4/4)及び類洞内褐色色素沈着(1/4)[§] 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 摂餌量減少(投与 1 週以降) ・ RBC、Hb、Ht、MCV、MCH 及び PLT 減少 ・ APTT 延長 ・ ALT[§]及び無機リン増加 ・ クロール減少 ・ 肝絶対[§]及び比重量増加 ・ 胸腺絶対及び比重量減少[§] ・ 胸腺萎縮(3/4)[§] ・ 骨髓造血亢進(4/4) ・ 肝小葉中心性くもり硝子様変性(2/4)[§]及び類洞内褐色色素沈着(1/4)[§] ・ 腎尿細管上皮変性(4/4)及び尿細管上皮内硝子滴(1/4)[§]

² 体重比重量のことを比重量という（以下同じ。）。

	<ul style="list-style-type: none"> 腎尿細管上皮変性(2/4)[§]及び尿細管上皮内硝子滴(2/4)[§] 精巢未成熟(4/4)[§]、精巢上体精子数減少(4/4)及び前立腺未成熟(4/4) 	
300 ppm 以上	300 ppm 以下 毒性所見なし	<ul style="list-style-type: none"> 体重減少^{§§}投与2週以降) Cre 及び BUN 増加
100 ppm		毒性所見なし

[§]：統計学的有意差はないが、検体投与の影響と判断した。

^{§§}：300 ppm 投与群では統計学的有意差はないが、検体投与の影響と判断した。

(4) 28日間亜急性神経毒性試験（ラット）

SDラット（一群雌雄各10匹）を用いた混餌（原体：0、200、800及び4,000 ppm、平均検体摂取量は表29参照）投与による28日間亜急性神経毒性試験が実施された。

表29 28日間亜急性神経毒性試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		200 ppm	800 ppm	4,000 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	18	71	347
	雌	19	74	336

本試験において、4,000 ppm 投与群の雌雄で体重増加抑制（雄：投与4日以降、雌：投与11日以降）及び摂餌量減少（雌雄：投与8日以降）が認められ、機能検査において、4,000 ppm 投与群の雌で前肢握力の低下（投与28日）及び自発運動量の減少（投与28日）が認められたので、無毒性量は雌雄とも800 ppm（雄：71 mg/kg 体重/日、雌：74 mg/kg 体重/日）であると考えられた。亜急性神経毒性は認められなかった。（参照2、6）

1.1 慢性毒性試験及び発がん性試験

(1) 2年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）

SDラット〔主群：一群雌雄各50匹、衛星群：一群雌雄各20匹（12か月時に中間と殺）〕を用いた混餌（原体：0、100、400及び1,200 ppm、平均検体摂取量は表30参照）投与による2年間慢性毒性/発がん性併合試験が実施された。

表30 2年間慢性毒性/発がん性併合試験（ラット）の平均検体摂取量

投与群		100 ppm	400 ppm	1,200 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	4.69	19.2	57.9
	雌	6.02	23.9	76.1

検体投与に関連して発生頻度の増加した腫瘍性病変は認められなかった。

1 本試験において、1,200 ppm 投与群の雌雄で体重増加抑制(雄：投与1週以降、
2 雌：投与1週以降)、同投与群の雌で ALP 増加が認められたので、無毒性量は
3 雌雄とも 400 ppm (雄：19.2 mg/kg 体重/日、雌：23.9 mg/kg 体重/日) である
4 と考えられた。発がん性は認められなかった。(参照 2、6)

6 (2) 78 週間発がん性試験 (マウス)

7 B6C3F1 マウス [主群：一群雌雄各 50 匹、中間と殺群：一群雌雄各 15 匹 (52
8 週時に中間と殺)] を用いた混餌 (原体：0、400、1,200 及び 3,600 ppm、平均
9 検体摂取量は表 31 参照) 投与による 78 週間発がん性試験が実施された。

11 表 31 78 週間発がん性試験 (マウス) の平均検体摂取量

投与群		400 ppm	1,200 ppm	3,600 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	雄	53.4	175	512
	雌	78.6	226	592

12 各投与群で認められた毒性所見は表 32 に示されている。

13 3,600 ppm 投与群の雄で小葉中心性肝細胞肥大が認められたが、肝毒性を示唆
14 する他の病理組織学的変化が認められなかったことから、適応性変化であると考
15 えられた。

16 検体投与に関連して発生頻度の増加した腫瘍性病変は認められなかった。

17 本試験において、1,200 ppm 以上投与群の雄で腎絶対及び比重量の増加が、400
18 ppm 以上投与群の雌で体重増加抑制等が認められたので、無毒性量は雄で 400
19 ppm (53.4 mg/kg 体重/日)、雌で 400 ppm 未満 (78.6 mg/kg 体重/日未満) で
20 あると考えられた。発がん性は認められなかった。(参照 2、6)

23 表 32 78 週間発がん性試験 (マウス) で認められた毒性所見

投与群	雄	雌
3,600 ppm	・体重増加抑制(投与1週以降)及び 摂餌量減少 [§] (投与1週以降)	・摂餌量減少 [§] (投与1週以降) ・副腎被膜下細胞過形成
1,200 ppm 以上	・腎絶対及び比重量増加	
400 ppm 以上	400 ppm 毒性所見なし	・体重増加抑制 ^a ・腎絶対及び比重量増加

24 [§]：統計学的有意差はないが、検体投与の影響と考えられた。

25 ^a：3,600 ppm 投与群では投与3週以降、1,200 ppm 投与群では投与14週以降、400 ppm 投与群で
26 は投与20週以降に認められた。

28 1 2. 生殖発生毒性試験

29 (1) 2 世代繁殖試験 (ラット) ①

30 SD ラット (一群雌雄各 24 匹) を用いた混餌 (原体：0、15、75 及び 375 ppm、
31 平均検体摂取量は表 33 参照) 投与による 2 世代繁殖試験が実施された。予備試

1 験（0、40、100、500及び1,500 ppm）の100 ppm以上投与群で児動物の体重
2 に低値がみられたことを根拠に、本試験の最高用量として375 ppmが設定され
3 た。

5 表33 2世代繁殖試験（ラット）①の平均検体摂取量

投与群			15 ppm	75 ppm	375 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	P世代	雄	0.94	4.76	23.6
		雌	1.24	6.14	31.4
	F ₁ 世代	雄	1.10	5.52	27.2
		雌	1.32	6.59	32.8

6
7 各投与群で認められた毒性所見は表34に示されている。

8 本試験において、親動物では375 ppm投与群のF₁世代の雄で副腎絶対及び比
9 重量の減少、75 ppm以上投与群のF₁世代の雌で体重増加抑制が認められ、児動
10 物では本試験の最高用量375 ppmで毒性所見は認められなかったため、無毒性
11 量は親動物の雄で75 ppm(P雄：4.76 mg/kg体重、F₁雄：5.52 mg/kg体重/日)、
12 雌で15 ppm(P雌：1.24 mg/kg体重/日、F₁雌：1.32 mg/kg体重/日)、児動物
13 で本試験の最高用量375 ppm(P雄：23.6 mg/kg体重/日、P雌：31.4 mg/kg体
14 重/日、F₁雄：27.2 mg/kg体重/日、F₁雌：32.8 mg/kg体重/日)であると考えら
15 れた。繁殖能に対する影響は認められなかった。（参照6、7）

17 表34 2世代繁殖試験（ラット）①で認められた毒性所見

投与群		親：P、児：F ₁		親：F ₁ 、児：F ₂	
		雄	雌	雄	雌
親動物	375 ppm	375 ppm以下 毒性所見なし	375 ppm以下 毒性所見なし	・副腎絶対及び 比重量減少	
	75 ppm以上				75 ppm以下 毒性所見なし
	15 ppm				毒性所見なし
児動物	375 ppm以下	毒性所見なし		毒性所見なし	

18
19 (2) 2世代繁殖試験（ラット）②<参考資料³>

20 Wistarラット（一群雌雄各15匹）を用いた混餌（原体：0、100及び2,500 ppm、
21 平均検体摂取量は表35参照）投与による2世代繁殖試験が実施された。

【代田専門委員より】

参考資料ですが、精巣への検討を行う試験が実施されることになった理由も記載してある
とよいのではないのでしょうか。

【事務局より】

³ 本試験は検体投与による精巣への影響を検討するために実施されたものであり、F₁動物において雄
のみに投与が行われていること及び投与量が2用量であることから参考資料とした。

本試験は、評価資料としないこととされた 3 世代繁殖試験の F₁ 親動物雄にみられた精巣に対する影響の再現性を確認する目的で実施されたため、得られた結果のみ記載することとされました。

表 35 2 世代繁殖試験（ラット）②の平均検体摂取量

投与群		100 ppm	2,500 ppm
平均検体摂取量 (mg/kg 体重/日)	P 世代	雄	223
		雌	219
	F ₁ 世代	雄	270
		雌	

各投与群で認められた毒性所見は表 36 に示されている。

P 世代における 100 ppm 投与群で、軽度な精子細胞の変性・消失（1/15 例）及び前立腺腔内の石灰沈着が観察されたが、これらの変化は対照群にも同様に認められ、検体投与に起因した変化とは認められなかった。2,500 ppm 投与群で、組織学的検査において、検体投与の影響は認められなかった。代田専門委員修文

【事務局より】

精巣の病理組織学的検査を実施したのは F₁ 世代の雄であり、本パラグラフはその結果が記載されています。

F₁ 世代における 2,500 ppm 投与群の雄では、成長抑制が強く、外生殖器の発達も不十分であり、無処置動物の雌との交配で妊娠動物が得られなかった。

100 ppm（P 雄：9.9 mg/kg 体重/日、P 雌：10.8 mg/kg 体重/日、F₁ 雄：9.9 mg/kg 体重/日）の用量で、精巣に対する影響はないと考えられた。（参照 2、6）

表 36 2 世代繁殖試験（ラット）②で認められた毒性所見

投与群	親：P、児：F ₁		親：F ₁ 、児：F ₂
	雄	雌	雄
親動物	2,500 ppm	・ 体重増加抑制 ・ 摂餌量減少	・ 体重増加抑制 ・ 摂餌量減少
	100 ppm 以上	100 ppm 毒性所見なし	100 ppm 毒性所見なし
児動物	2,500 ppm	・ 総新生児数及び総生存児数減少 ・ 新生児低体重 ・ 4 及び 21 日後生存児数低下	
	100 ppm 以上	・ 哺育児体重増加抑制	100 ppm 毒性所見なし

(3) 発生毒性試験（ラット）

Wistar ラット（一群雌 24 匹）の妊娠 6～15 日に強制経口（原体：0、10、50 及び 250 mg/kg 体重/日、溶媒：0.5%CMC 水溶液）投与して発生毒性試験が実

1 施された。

2 母動物では、250 mg/kg 体重/日投与群で体重増加抑制（妊娠 6～16 日以降）
3 及び摂餌量減少（妊娠 6～16 日以降）が認められた。

4 胎児では、250 mg/kg 体重/日投与群で低体重、生存胎児数の減少及び死亡胎
5 児率の上昇、第 14 肋骨の増加、骨化不全及び骨化遅延（第 2 及び第 5 胸骨）並
6 びに仙尾椎化骨核数減少が認められた。

7 また、250 mg/kg 体重/日投与群で心室中隔欠損の増加が認められたが、胎児
8 の成長抑制に起因するものと考えられた。

9 本試験における無毒性量は、母動物及び胎児とも 50 mg/kg 体重/日であると考
10 えられた。（参照 2、6）

12 (4) 発生毒性試験（ウサギ）

13 NZW ウサギ（一群雌 18 匹）の妊娠 6～18 日に強制経口（原体：0、5、20 及
14 び 80 mg/kg 体重/日、溶媒：5%アラビアゴム）投与して発生毒性試験が実施さ
15 れた。

16 母動物では、80 mg/kg 体重/日投与群で、死亡数増加（8 例⁴、妊娠 14～22 日）、
17 流産（1 例、時期不明）、全胚吸収（7 例）、体重減少（妊娠 6～8 日）/体重増
18 加抑制（妊娠 8 日以降）及び摂餌量減少（妊娠 6～7 日以降）が認められた。ま
19 た、同投与群で冷耳、排糞量減少、うずくまり姿勢、ふらつき、黄体数、着床数
20 及び生存胎児数の減少並びに死亡胎児数の増加が認められた。

21 胎児では、いずれの投与群においても検体投与による毒性所見は認められな
22 かった。

23 本試験における無毒性量は、母動物で 20 mg/kg 体重/日、胎児で本試験の最高
24 用量 80 mg/kg 体重/日であると考えられた。催奇形性は認められなかった。（参
25 照 2、6）

【代田専門委員より】

- ①（網掛け部）脚注の「投与前」の死亡は妊娠 6 日より前の時期でしょうか？その時期で
すと、影響の判断から除外されることになるはずですが、切迫と殺のみでしたら、そのよ
うに記載の方が正確ではないでしょうか。また、一般毒性学的所見（一般状態、死亡、
体重推移、摂餌量など）と生殖発生毒性所見（全胚吸収、着床数、生存・死亡胎児数な
ど）はできるだけ分けて記載されているとよいのではないのでしょうか。
- ②（下線部）妊娠動物を用いて行われている試験ですが、黄体数の減少を投与の影響と判
断された変化があったのでしょうか。

【事務局より】

- ①投与前の死亡個体については、妊娠 6 日（投与開始前）に間引きと殺した個体でした。
- ②80 mg/kg 体重/日投与群において、減少傾向がみられました。

26

⁴ 死亡 1 例（投与前）、切迫と殺 7 例

1 13. 遺伝毒性試験

2 MCPB エチル原体の細菌を用いた DNA 修復試験及び復帰突然変異試験、チャイ
3 ニーズハムスター卵巣由来細胞 (CHO-K1) を用いた *in vitro* 染色体異常試験、マ
4 ウスを用いた宿主経路試験並びにマウスを用いた *in vivo* 小核試験が実施された。

5 結果は表 37 に示されているとおり、全て陰性であったことから、MCPB エチル
6 に遺伝毒性はないものと考えられた。(参照 2、6、8)

7
8 表 37 遺伝毒性試験概要 (原体)

試験	対象	処理濃度・投与量	結果
<i>in vitro</i>	DNA 修復試験 <i>Bacillus subtilis</i> (H17、M45 株)	0.226~22.6 µg/ディスク	陰性
	復帰突然変異試験 <i>Salmonella typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537 株) <i>Escherichia coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	TA100、TA1535、TA1537 株 : 5.86~750 µg/プレート(-S9) 46.9~1,500 µg/プレート(+S9) TA98、WP2 <i>uvrA</i> 株 : 156~5,000 µg/プレート(+/-S9)	陰性
	染色体異常試験 チャイニーズハムスター 卵巣由来細胞(CHO-K1)	2~20 µg/mL(+/-S9) (-S9 : 20 時間処理、+S9 : 2 時間 処理)	陰性
宿主 経路	復帰突然 変異試験 ICR マウス <i>S. typhimurium</i> (G46 株)	175、350 mg/kg 体重/日 (2 回強制経口投与)	陰性
<i>in vivo</i>	小核試験 ICR マウス 雄 6 匹 (骨髓細胞)	500、600、720 mg/kg 体重/日 (2 回強制経口投与) (最終投与 18~24 時間後に採取)	陰性

9 注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

10
11 主として動物、植物及び土壌由来の代謝物 C の細菌を用いた DNA 修復試験及
12 び復帰突然変異試験が実施された。

13 結果は表 38 に示されている。試験結果は全て陰性であった。(参照 2、6)

14
15 表 38 遺伝毒性試験概要 (代謝物 C)

試験	対象	処理濃度・投与量	結果
<i>in vitro</i>	DNA 修復試験 <i>B. subtilis</i> (H17、M45 株)	250 ~ 10,000 µg/ディスク (-S9)	陰性
	復帰突然変異試験 <i>S. typhimurium</i> (TA98、TA100、TA1535、 TA1537、TA1538 株) <i>E. coli</i> (WP2 <i>uvrA</i> 株)	10 ~ 5,000 µg/プレート (+/-S9)	陰性

16 注) +/-S9 : 代謝活性化系存在下及び非存在下

1 14. その他の試験

2 (1) ラットを用いた血液学的及び血液生化学的検査に及ぼす影響<参考資料⁵>

3 Wistar ラット（一群雌雄各4匹）を用いて4週間の混餌（原体：0、125、500
4 及び2,000 ppm）投与による血液学的及び血液生化学的検査に及ぼす影響が検討
5 された。血清及び赤血球中 ChE 活性は表 39 に示されている。（参照 2、6）
6

7 表 39 血清及び赤血球中 ChE 活性

性別	投与量 (ppm)	血清 ChE ^a		血清 ChE ^b		赤血球 ChE ^b	
		活性値	対照群比 (%)	活性値	対照群比 (%)	活性値	対照群比 (%)
雄	0	0.16	100	0.31	100	1.33	100
	125	0.15	92.0	0.33	106	1.16	87.0
	500	0.15	92.0	0.28	90.9	1.21	91.0
	2,000	0.14	82.8	0.29	93.8	1.21	91.0
雌	0	0.84	100	1.02	100	1.46	100
	125	0.69	81.8	0.89	87.6	1.36	93.1
	500	0.60	70.9	0.86	84.4	1.35	92.7
	2,000	0.46	54.6	0.70	68.7	1.19	81.7

8 ^a : EIKEN Cholinesterase Determination Set9 ^b : DTNB Method

10

⁵ 詳細が不明であることから、参考資料とした。

1 III. 食品健康影響評価

2 参照に挙げた資料を用いて、農薬「MCPB エチル」の食品健康影響評価を実施
3 した。

4 ¹⁴C で標識した MCPB エチルのラットを用いた動物体内運命試験の結果、経口投
5 与された MCPB エチルの吸収率は、少なくとも 93.4%であった。投与放射能は、
6 投与後 72 時間に尿及び糞中に 89.2%~91.6%排泄され、主に尿中に排泄された。
7 組織中残留放射能は、主に脂肪、肝臓、腎臓等に認められた。尿及び糞中に MCPB
8 エチルは検出されず、尿及び糞中の主な代謝物として、C、E、F、G、H、I 及び K
9 が認められた。

10 ¹⁴C で標識した MCPB エチルの植物体内運命試験の結果、10%TRR を超える代
11 謝物として、B、C 及び G 並びに C、D、E 及び H の抱合体が認められた。

12 MCPB エチル並びに代謝物 B 及び C を分析対象化合物とした作物残留試験の結
13 果、MCPB エチル及び代謝物 B の含量の最大残留値は、温州みかん（果皮）の 0.93
14 mg/kg、代謝物 C の最大残留値は、温州みかん（果皮）の 0.69 mg/kg であった。

15 各種毒性試験結果から、MCPB エチル投与による影響は、主に体重（増加抑制）
16 及び腎臓（重量増加等）に認められた。神経毒性、発がん性、繁殖能に対する影響
17 及び遺伝毒性は認められなかった。

18 ラットを用いた発生毒性試験において、母動物に毒性影響の認められる用量で心
19 室中隔欠損の増加が認められた。ウサギを用いた発生毒性試験において、催奇形性
20 は認められなかった。

21 植物体内運命試験において、10%TRR を超える代謝物として B、C 及び G 並び
22 に C、D、E 及び H の抱合体が認められた。代謝物 E、G 及び H はラットにおい
23 ても認められていること、代謝物 D はラットでは認められていないが、ラットにお
24 いて認められている代謝物 I の生成過程における推定代謝物であること、代謝物 C
25 はラットにおいて認められているが、MCPB エチルに比べ急性毒性が強いとの知
26 見が得られていること（参照 9）、代謝物 B はラットで認められず、代謝物 C の生
27 成過程における推定代謝物であることから、農産物中の暴露評価対象物質を MCPB
28 エチル並びに代謝物 B 及び C と設定した。

29 各試験における無毒性量等は表 40 に、単回経口投与等により惹起されると考え
30 られる毒性影響等は表 41 に示されている。

31 各試験で得られた無毒性量のうち最小値は、ラットを用いた 2 世代繁殖試験①の
32 1.24 mg/kg 体重/日であった。これを根拠に安全係数 100 で除した場合、一日摂取
33 許容量（ADI）として 0.012 mg/kg 体重/日が算出される。一方、マウスを用いた
34 78 週間発がん性試験の雌では無毒性量が得られておらず、最小毒性量は 78.6
35 mg/kg 体重/日であった。この試験を根拠に、仮に追加の安全係数 10 を考慮したと
36 しても、ADI は 0.078 mg/kg 体重/日となり、ラットを用いた 2 世代繁殖試験①の
37 無毒性量を根拠として、安全係数 100 で除した値よりも大きくなるため、ADI を
38 0.012 mg/kg 体重/日と設定しても安全性は担保されるものと考えられた。

1 以上から、食品安全委員会農薬専門調査会は、0.012 mg/kg 体重/日を ADI と設
2 定した。

3 また、MCPB エチルの単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響に対
4 する無毒性量のうち最小値は、ウサギを用いた発生毒性試験で得られた 20 mg/kg
5 体重/日であったことから、これを根拠として、安全係数 100 で除した 0.2 mg/kg
6 体重を急性参照用量（ARfD）と設定した。

7

ADI	0.012 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料)	2 世代繁殖試験①
(動物種)	ラット
(期間)	2 世代
(投与方法)	混餌
(無毒性量)	1.24 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

8

ARfD	0.2 mg/kg 体重
(ARfD 設定根拠資料)	発生毒性試験
(動物種)	ウサギ
(期間)	妊娠 6～18 日
(投与方法)	強制経口
(無毒性量)	20 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

9

10 暴露量については、当評価結果を踏まえて暫定基準値の見直しを行う際に確認す
11 ることとする。

12

13 参考

14 <EPA（2006年）>（MCPB 酸及び塩）

cRfD	0.015 mg/kg 体重/日
(cRfD 設定根拠資料)	慢性毒性/発がん性併合試験 (MCPA)
(動物種)	ラット
(期間)	2年間
(投与方法)	混餌
(無毒性量)	4.4 mg/kg 体重/日
(不確実係数)	300（発達神経毒性試験の欠如に よる追加係数 3）

15

aRfD	0.2 mg/kg 体重
(aRfD 設定根拠資料)	急性神経毒性 (MCPA)
(動物種)	ラット
(期間)	単回
(投与方法)	強制経口
(無毒性量)	200 mg/kg 体重
(不確実係数)	1,000 (発達神経毒性試験の欠如による追加係数 10)

1

2 <EC (2005 年) > (MCPB 酸)

ADI	0.01 mg/kg 体重/日
(ADI 設定根拠資料)	慢性毒性/発がん性併合試験 (MCPA)
(動物種)	ラット
(期間)	2 年間
(投与方法)	混餌
(無毒性量)	1.3 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

3

ARfD	0.05 mg/kg 体重
(ARfD 設定根拠資料)	発生毒性試験
(動物種)	ウサギ
(投与方法)	強制経口
(無毒性量)	5 mg/kg 体重/日
(安全係数)	100

4

5

6

(参照 10、11)

1

表 40 各試験における無毒性量等

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量(mg/kg 体重/日) ¹⁾	
			食品安全委員会 農薬専門調査会	参 考 (農薬抄録)
ラット	13週間亜急性毒性試験	0、5、25、100、400	雌雄：100 雌雄：体重増加抑制、肝臓の門脈周囲性細胞浸潤	雌雄：100 雌雄：体重増加抑制、肝臓の門脈周囲性細胞浸潤
	28日間亜急性神経毒性試験	0、200、800、4,000 ppm 雄：0、18、71、347 雌：0、19、74、336	一般毒性 雄：71 雌：74 雌雄：体重増加抑制、摂餌量減少等 (神経毒性は認められない)	一般毒性 雄：71 雌：74 神経毒性 雄：347 雌：336 雌雄：体重増加抑制、摂餌量減少 (神経毒性は認められない)
	2年間慢性毒性/発がん性併合試験	0、100、400、1,200 ppm 雄：0、4.69、19.2、57.9 雌：0、6.02、23.9、76.1	雄：19.2 雌：23.9 雌雄：体重増加抑制等 (発がん性は認められない)	雄：19.2 雌：23.9 雌雄：体重増加抑制等 (発がん性は認められない)
	2世代繁殖試験①	0、15、75、375 ppm P雄：0、0.94、4.76、23.6 P雌：0、1.24、6.14、31.4 F ₁ 雄：0、1.10、5.52、27.2 F ₁ 雌：0、1.32、6.59、32.8	親動物 P雄：4.76 P雌：1.24 F ₁ 雄：5.52 F ₁ 雌：1.32 児動物 P雄：23.6 P雌：31.4 F ₁ 雄：27.2 F ₁ 雌：32.8	親動物 P雄：23.6 P雌：1.24 F ₁ 雄：27.2 F ₁ 雌：1.32 児動物 P雄：23.6 P雌：31.4 F ₁ 雄：27.2 F ₁ 雌：32.8

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量(mg/kg 体重/日) ¹⁾	
			食品安全委員会 農薬専門調査会	参 考 (農薬抄録)
			親動物 雄：副腎絶対及び比 重量減少 雌：体重増加抑制 児動物 毒性所見なし (繁殖能に対する影 響は認められない)	親動物 雄：毒性所見なし 雌：体重増加抑制 児動物 毒性所見なし (繁殖能に対する影 響は認められない)
	発生毒性 試験	0、10、50、250	母動物及び胎児：50 母動物：体重増加抑 制等 胎児：低体重等 (心室中隔欠損の増 加)	母動物及び胎児：50 母動物：体重増加抑 制等 胎児：体重低値等 (催奇形性は認めら れない)
マウス	13週間亜 急性毒性 試験	0、10、50、125、500	雌雄：500 雌雄：毒性所見なし	雌雄：500 雌雄：毒性所見なし
	78週間発 がん性試 験	0、400、1,200、3,600 ppm ----- 雄：0、53.4、175、512 雌：0、78.6、226、592	雄：53.4 雌：－ 雄：腎絶対及び比 重量増加 雌：体重増加抑制等 (発がん性は認めら れない)	雄：175 雌：－ 雄：小葉中心性肝細 胞肥大 雌：体重増加抑制 (発がん性は認めら れない)
ウサギ	発生毒性 試験	0、5、20、80	母動物：20 胎児：80 母動物：体重減少/ 体重増加抑制等 胎児：毒性所見なし (催奇形性は認めら れない)	母動物：20 胎児：80 母動物：体重増加抑 制等 胎児：毒性所見なし (催奇形性は認めら れない)

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重/日)	無毒性量(mg/kg 体重/日) ¹⁾	
			食品安全委員会 農薬専門調査会	参 考 (農薬抄録)
イヌ	90日間亜 急性毒性 試験	0、100、300、2,000 ppm	雄：7.47 雌：2.70	雄：2.45 雌：2.70
		雄：0、2.45、7.47、51.9 雌：0、2.70、8.51、55.0	雄：精巣、精巣上体、 前立腺絶対及び比重 量減少等 雌：体重減少等	雌雄：体重増加抑制 等
ADI			NOAEL：1.24 SF：100 ADI：0.012	NOAEL：1.24 SF：100 ADI：0.012
ADI 設定根拠資料			ラット 2世代繁殖試 験①	ラット 2世代繁殖試 験①

- 1 NOAEL：無毒性量 ADI：一日摂取許容量 SF：安全係数
2 ¹⁾：無毒性量欄には、最小毒性量で認められた主な毒性所見を記した。
3 -：無毒性量は設定できなかった。
4

1
2

表 41 単回経口投与等により生ずる可能性のある毒性影響等

動物種	試験	投与量 (mg/kg 体重又は mg/kg 体重/日)	無毒性量及び急性参照用量設定に関連するエンド ポイント ¹⁾ (mg/kg 体重又は mg/kg 体重/日)
ラット	一般薬理試験 (中枢神経系)	0、125、500、2,000	雄：125 雄：体温低下、歩行異常
マウス	一般薬理試験 (運動協調性)	0、125、500、2,000	雄：500 雄：運動協調性低下
	一般薬理試験 (自発運動)	0、31.3、125、500	雄：125 雄：自発運動量の減少
ウサギ	発生毒性試験	0、5、20、80	母動物：20 母動物：体重減少、うずくまり姿勢等
ARfD			NOAEL：20 SF：100 ARfD：0.2
ARfD 設定根拠資料			ウサギ発生毒性試験

3 ARfD：急性参照用量 SF：安全係数 NOAEL：無毒性量

4 ¹⁾ 最小毒性量で認められた主な毒性所見を記した。5
6
7

1 <別紙1：代謝物/分解物略称>

記号	略号	化学名
B	MCPB 酸	4-(4-chloro- <i>o</i> -tolylloxy) butyric acid
C	MCPA	4-chloro- <i>o</i> -tolylloxyacetic acid
D	CMP	4-chloro-2-methylphenol
E	Hydroxymethyl-MCPA	4-chloro-2-hydroxymethyl-phenoxyacetic acid
F	Dihydroxy-MCPB	4-chloro-2-hydroxymethyl-(2-hydroxy)butyric acid
G	Hydroxymethyl-MCPB	4-[4-chloro-2-(hydroxymethyl)phenoxy]butanoic acid
H	Hydroxy-MCPB	4-(4-chloro- <i>o</i> -tolylloxy)-3-hydroxybutanoic acid
I	CMP 硫酸抱合体	4-chloro-2-methylsulfonic acid
J	MCPA システイン抱合体	—
K	MCPA メルカプツール酸抱合体	—
L	MCPA チオ乳酸抱合体	—
M	光分解生成物	ethyl 4-(4-hydroxy- <i>o</i> -tolylloxy)butyrate
N	光分解生成物	—
O	光分解生成物	—

—：記載なし

2
3
4
5

1 <別紙2：検査値等略称>

略称	名称
ai	有効成分量 (active ingredient)
ACh	アセチルコリン
ALP	アルカリホスファターゼ
ALT	アラニンアミノトランスフェラーゼ [=グルタミン酸ピルビン酸トランスアミナーゼ (GPT)]
APTT	活性化部分トロンボプラスチン時間
AST	アスパラギン酸アミノトランスフェラーゼ [=グルタミン酸オキサロ酢酸トランスアミナーゼ (GOT)]
AUC	薬物濃度曲線下面積
BUN	血液尿素窒素
ChE	コリンエステラーゼ
C _{max}	最高濃度
CMCNa	カルボキシメチルセルロースナトリウム
Cre	クレアチニン
EC	欧州委員会
EPA	米国環境保護庁
Glu	グルコース (血糖)
Hb	ヘモグロビン (血色素量)
His	ヒスタミン
Ht	ヘマトクリット値 [=血中血球容積 (PCV)]
LC ₅₀	半数致死濃度
LD ₅₀	半数致死量
MCH	平均赤血球血色素量
MCV	平均赤血球血色素濃度
PHI	最終使用から収穫までの日数
PLT	血小板数
PSP	フェノールスルホンフタレイン
PT	プロトロンビン時間
RBC	赤血球数
T _{1/2}	消失半減期
TAR	総投与 (処理) 放射能
T.Chol	総コレステロール
T _{max}	最高濃度到達時間
TRR	総残留放射能
WBC	白血球数

1 <別紙 3：作物残留試験成績>

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
水稲 (玄米) 1971 年度	1	330 ^{G, a}	1	90					<0.02 ^b	<0.02 ^b		
	1		1	90					<0.02 ^b	<0.02 ^b		
水稲 (玄米) 1973 年度	1	400 ^{G, a}	3 ^a	55	<0.02	<0.02			<0.02 ^c	<0.02 ^c		
	1	320 ^G	3 ^a	75	<0.02	<0.02			<0.02 ^c	<0.02 ^c		
水稲 (稲わら) 1973 年度	1	400 ^{G, a}	3 ^a	55	<0.05	<0.05			<0.08 ^c	<0.08 ^c		
	1	320 ^G	3 ^a	75	<0.05	<0.05			<0.08 ^c	<0.08 ^c		
水稲 (玄米) 1980 年度	1	400 ^{G, a}	2	133	<0.005 ^c	<0.005 ^c			<0.02	<0.02	<0.005	<0.005
	1		2	103	<0.005 ^c	<0.005 ^c			<0.02	<0.02	<0.005	<0.005
水稲 (稲わら) 1980 年度	1	400 ^{G, a}	2	133	<0.01 ^c	<0.01 ^c			<0.03	<0.03	<0.003	<0.003
	1		2	103	<0.01 ^c	<0.01 ^c			<0.03	<0.03	<0.003	<0.003
水稲 (玄米) 1993 年度	1	700 ^{SL, a}	2	88	<0.005	<0.005			<0.01 ^b	<0.01 ^b		
	1	300 ^G	2	111	<0.005	<0.005			<0.01 ^b	<0.01 ^b		
水稲 (稲わら) 1993 年度	1	700 ^{SL, a}	2	88	<0.02	<0.02			<0.02 ^b	<0.02 ^b		
	1	300 ^G	2	111	<0.02	<0.02			0.04 ^b	0.04 ^b		

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
水稲 (玄米) 2001 年度	1	320 ^{SC}	2	14	<0.01	<0.01	/		<0.01	<0.01	/	
				21	<0.01	<0.01			<0.01	<0.01		
				28	<0.01	<0.01			<0.01	<0.01		
	1		2	11	<0.01	<0.01			<0.01	<0.01		
				17	<0.01	<0.01			<0.01	<0.01		
				22	<0.01	<0.01			<0.01	<0.01		
水稲 (稲わら) 2001 年度	1	320 ^{SC}	2	14	<0.04	<0.04	/		<0.02	<0.02	/	
				21	<0.04	<0.04			<0.02	<0.02		
				28	<0.04	<0.04			<0.02	<0.02		
	1		2	11	<0.04	<0.04			<0.02	<0.02		
				17	<0.04	<0.04			<0.02	<0.02		
				22	<0.04	<0.04			<0.02	<0.02		
水稲 (玄米) 2009 年度	1	320 ^G	2	46	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
				61	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	
				76	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	
	1		2	45	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005
				60	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	
				75	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005	

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)								
					公的分析機関				社内分析機関				
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	
水稲 (稲わら) 2009 年度	1	320 ^G	2	46	0.01	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				61	0.03	0.03	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				76	0.01	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
	1		2	45	0.01	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				60	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				75	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
温州みかん [施設・無袋] (果肉) 2003、2004 年度	1	700 ^{EW、a} ×3 350 ^{EW} ×2	5 ^a	7 ^a	<0.01	<0.01	/	/	<0.01	<0.01	/	/	
				14	<0.01	<0.01			<0.01	<0.01			
				21	<0.01	<0.01			<0.01	<0.01			
	1		800 ^{EW、a} ×3 400 ^{EW} ×2	5 ^a	7 ^a	<0.01			<0.01	<0.01			<0.01
					14	<0.01			<0.01	<0.01			<0.01
					21	<0.01			<0.01	<0.01			<0.01
温州みかん [施設・無袋] (果皮) 2003、2004 年度	1	700 ^{EW、a} ×3 350 ^{EW} ×2	5 ^a	7 ^a	0.16	0.16	0.10	0.10					
				14	0.10	0.09	0.07	0.07					
				21	0.07	0.06	0.09	0.09					
	1		800 ^{EW、a} ×3 400 ^{EW} ×2	5 ^a	7 ^a	0.68	0.66	0.74	0.72				
					14	0.41	0.40	0.42	0.40				
					21	0.40	0.38	0.36	0.36				

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
温州みかん [施設・無袋] (果肉) 2009 年度	1	400 ^{EW}	2	10	<0.01	<0.01	0.16	0.16	<0.01	<0.01	0.14	0.14
				20	<0.01	<0.01	0.18	0.18	<0.01	<0.01	0.13	0.13
				30	<0.01	<0.01	0.25	0.25	<0.01	<0.01	0.17	0.17
				40	<0.01	<0.01	0.26	0.26	<0.01	<0.01	0.12	0.12
	1		2	10	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				20	<0.01	<0.01	0.01	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				30	<0.01	<0.01	0.02	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				40	<0.01	<0.01	0.03	0.03	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
温州みかん [施設・無袋] (果皮) 2009 年度	1	400 ^{EW}	2	10	0.93	0.92	0.69	0.68	0.42	0.42	0.41	0.40
				20	0.57	0.56	0.54	0.53	0.32	0.31	0.31	0.30
				30	0.33	0.32	0.23	0.23	0.21	0.20	0.16	0.16
				40	0.23	0.23	0.21	0.21	0.13	0.13	0.12	0.12
	1		2	10	0.21	0.20	0.19	0.19	0.05	0.05	0.08	0.08
				20	0.07	0.07	0.10	0.10	0.03	0.03	0.06	0.06
				30	0.13	0.13	0.17	0.17	0.04	0.04	0.06	0.06
				40	0.11	0.10	0.13	0.13	0.03	0.03	0.05	0.04

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
温州みかん [施設・無袋] (果肉) 2010 年度	1	400 ^{EW}	2	10	<0.01	<0.01	0.16	0.16	<0.01	<0.01	0.10	0.10
				20	<0.01	<0.01	0.17	0.17	<0.01	<0.01	0.10	0.10
				40	<0.01	<0.01	0.38	0.37	<0.01	<0.01	0.18	0.18
				60	<0.01	<0.01	0.31	0.30	<0.01	<0.01	0.13	0.12
	1		2	10	<0.01	<0.01	0.11	0.10	<0.01	<0.01	0.07	0.07
				20	<0.01	<0.01	0.12	0.12	<0.01	<0.01	0.05	0.05
				40	<0.01	<0.01	0.12	0.12	<0.01	<0.01	0.08	0.08
				60	<0.01	<0.01	0.10	0.10	<0.01	<0.01	0.05	0.05
温州みかん [施設・無袋] (果皮) 2010 年度	1	400 ^{EW}	2	10	0.55	0.54	0.52	0.52	0.22	0.22	0.29	0.28
				20	0.40	0.40	0.47	0.46	0.14	0.14	0.21	0.20
				40	0.24	0.24	0.30	0.30	0.15	0.15	0.14	0.14
				60	0.22	0.22	0.28	0.28	0.15	0.14	0.15	0.15
	1		2	10	0.45	0.44	0.48	0.46	0.30	0.30	0.23	0.22
				20	0.29	0.28	0.28	0.28	0.16	0.16	0.14	0.14
				40	0.35	0.35	0.14	0.14	0.25	0.24	0.06	0.06
				60	0.19	0.19	0.08	0.08	0.16	0.16	0.04	0.04
なつみかん (果肉) 1981 年度	1	250 ^{EC}	1	10	<0.006 ^b <0.005 ^c	<0.006 ^b <0.005 ^c	/		<0.005	<0.005	/	
				19	<0.006 ^b <0.005 ^c	<0.006 ^b <0.005 ^c			<0.005	<0.005		

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)										
					公的分析機関				社内分析機関						
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C				
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値			
なつみかん (果肉) 1981 年度	1	250 ^{EC}	1	10	<0.006 ^b <0.005 ^c	<0.006 ^b <0.005 ^c	/		<0.005	<0.005	/				
				20	<0.006 ^b <0.005 ^c	<0.006 ^b <0.005 ^c			<0.005	<0.005					
なつみかん (果皮) 1981 年度	1	250 ^{EC}	1	10	<0.01	<0.01	/		<0.009	<0.009	/				
				19	<0.01	<0.01			<0.009	<0.009					
	1		1	10	<0.01	<0.01			<0.009	<0.009					
				20	<0.01	<0.01			<0.009	<0.009					
なつみかん (果実全体) 1981 年度	1	250 ^{EC}	1	10	/		/		/		<0.01	/			
				19							<0.01				
	1		1	10							<0.01			<0.01	<0.01
				20							<0.01			<0.01	<0.01
なつみかん [露地・無袋] (果実全体) 2008 年度	1	400 ^{EW}	2	10	0.05	0.05	<0.01	<0.01	0.04	0.04	0.02	0.02			
				20	0.03	0.03	0.02	0.02	0.03	0.03	0.02	0.02			
				30	0.02	0.02	0.02	0.02	0.01	0.01	0.01	0.01			
				40	0.02	0.02	0.02	0.02	<0.01	<0.01	0.01	0.01			
	1		2	10	0.31	0.30	0.10	0.10	0.20	0.20	0.09	0.08			
				20	0.11	0.11	0.11	0.11	0.06	0.06	0.07	0.06			
				30	0.12	0.12	0.07	0.07	0.10	0.10	0.05	0.04			
				40	0.05	0.05	0.07	0.07	0.04	0.04	0.06	0.06			

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
なつみかん [露地・無袋] (果実全体) 2009 年度	1	400 ^{EW}	2	10	0.03	0.03	0.02	0.02	0.03	0.03	0.01	0.01
				20	0.04	0.04	0.02	0.02	0.03	0.03	0.02	0.02
				30	0.03	0.03	0.03	0.03	0.04	0.04	0.05	0.05
				40	0.05	0.04	0.05	0.05	0.03	0.02	0.03	0.03
	1	1,900 ^{EW, a}	2	10	0.12	0.12	0.10	0.10	0.10	0.10	0.09	0.09
				20	0.09	0.08	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09	0.09
				30	0.03	0.03	0.13	0.12	0.01	0.01	0.10	0.10
				40	0.03	0.03	0.12	0.12	0.02	0.02	0.12	0.12
なつみかん [露地・無袋] (果実全体) 2010 年度	1	400 ^{EW}	2	10	0.07	0.06	0.03	0.03	0.05	0.05	0.02	0.02
				20	0.06	0.06	0.02	0.02	0.07	0.07	0.04	0.04
				40	0.05	0.05	0.06	0.06	0.07	0.06	0.06	0.06
				60	0.03	0.03	0.05	0.05	0.03	0.02	0.04	0.04
	1	576 ^{EW, a}	2	10	0.04	0.04	0.05	0.05	0.06	0.06	0.05	0.04
				20	0.05	0.04	0.06	0.06	0.05	0.05	0.05	0.05
				40	0.01	0.01	0.13	0.13	<0.01	<0.01	0.09	0.09
				60	0.01	0.01	0.10	0.10	<0.01	<0.01	0.08	0.08
ネーブル [無袋] (果肉) 1984 年度	1	200 ^{EC}	1	20	/		/		<0.005	<0.005	/	
				31					<0.005	<0.005		

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)								
					公的分析機関				社内分析機関				
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	
ネーブル [無袋] (果肉) 1984 年度	1	200 ^{EC}	1	20					0.034	0.032			
				31					0.022	0.020			
甘夏柑 [無袋] (果肉) 1984 年度	1	267 ^{EC}	1	21	<0.005	<0.005			<0.005	<0.005			
				31	<0.005	<0.005							
	1	200 ^{EC}	1	20	<0.005	<0.005			<0.005	<0.005			
				30	<0.005	<0.005			<0.005	<0.005			
甘夏柑 [無袋] (果皮) 1984 年度	1	267 ^{EC}	1	21	0.06	0.06			0.038	0.036			
				31	0.05	0.05			0.030	0.027			
	1	200 ^{EC}	1	20	<0.01	<0.01			<0.005	<0.005			
				30	<0.01	<0.01			<0.005	<0.005			
甘夏柑 [無袋] (果実全体) 1984 年度	1	267 ^{EC}	1	21					0.01				
				31					0.01				
	1	200 ^{EC}	1	20					<0.01			<0.01	<0.01
				30					<0.01			<0.01	<0.01
はっさく (果肉) 1984 年度	1	1.0 ^{EC} /樹 ^a	1	9 ^a					<0.005	<0.005			
				19					<0.005	<0.005			
はっさく (果皮) 1984 年度	1	1.0 ^{EC} /樹 ^a	1	9 ^a					0.034	0.028			
				19					0.010	0.009			

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
はっさく (果肉) 1993 年度	1	300 ^{EC}	2	20	<0.005	<0.005	/	<0.005	<0.005	/		
				30	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
		200 ^{EC}	2	20	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
				30	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
	1	400 ^{EC}	2	20	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
				30	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
		267 ^{EC}	2	20	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
				30	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
はっさく (果皮) 1993 年度	1	300 ^{EC}	2	20	0.02	0.02	0.06	0.06				
				30	0.02	0.02	0.05	0.04				
		200 ^{EC}	2	20	0.02	0.02	0.09	0.08				
				30	0.02	0.02	0.05	0.05				
	1	400 ^{EC}	2	20	0.07	0.07	0.10	0.10				
				30	0.04	0.04	0.03	0.03				
		267 ^{EC}	2	20	0.05	0.05	0.11	0.10				
				30	0.06	0.06	0.05	0.04				
はっさく (果実) 1993 年度	1	300 ^{EC}	2	20	0.03	0.03	0.02	0.02				
				30	0.02	0.02	0.01	0.01				
		200 ^{EC}	2	20	0.02	0.02	0.02	0.02				
				30	0.03	0.03	0.02	0.02				

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
はっさく (果実) 1993 年度	1	400 ^{EC}	2	20	<0.01	<0.01	/	0.04	0.04	/		
				30	<0.01	<0.01		0.01	0.01			
		267 ^{EC}	2	20	<0.01	<0.01		0.04	0.04			
				30	<0.01	<0.01		0.02	0.02			
伊予柑 (果肉) 1982 年度	1	1,000 ^{EC、a}	1	6 ^a	<0.005	<0.005	/	<0.006	<0.006	/		
				10	<0.005	<0.005		<0.006	<0.006			
				20	<0.005	<0.005		<0.006	<0.006			
		500 ^{EC、a}		10	<0.005	<0.005		<0.006	<0.006			
				20	<0.005	<0.005		<0.006	<0.006			
				333 ^{EC}	10	<0.005		<0.005	<0.006		<0.006	
		20			<0.005	<0.005		<0.006	<0.006			
		1		600~ 800 ^{EC、a}	1	4 ^a		<0.005	<0.005		<0.006	<0.006
	10		<0.005			<0.005		<0.006	<0.006			
	20		<0.005			<0.005		<0.006	<0.006			
	300~400 ^{EC}		10	<0.005		<0.005		<0.006	<0.006			
			20	<0.005		<0.005		<0.006	<0.006			
			200~267 ^{EC}	10		<0.005		<0.005	<0.006		<0.006	
	20			<0.005		<0.005		<0.006	<0.006			

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
伊予柑 (果皮) 1982 年度	1	1,000 ^{EC、a}	1	6 ^a	0.07	0.06	/	/	0.030	0.026	/	/
				10	<0.01	<0.01			0.013	0.012		
				20	<0.01	<0.01			0.012	0.010		
		500 ^{EC、a}		10	<0.01	<0.01			0.011	0.009		
				20	<0.01	<0.01			0.006	0.006		
				333 ^{EC}	10	<0.01			<0.01	<0.006		
	20	<0.01	<0.01		<0.006	<0.006						
	1	600~ 800 ^{EC、a}	1	4 ^a	0.16	0.14			0.112	0.106		
				10	0.09	0.08			0.072	0.066		
		300~400 ^{EC}		20	0.10	0.08			0.046	0.042		
				10	0.04	0.04			0.031	0.028		
				20	0.04	0.04			0.006	0.006		
		200~267 ^{EC}		10	0.03	0.03			0.015	0.013		
				20	<0.01	<0.01			<0.006	<0.006		
伊予柑 (果肉) 1980 年度	1	1,000 ^{EC、a}	1	5 ^a			<0.007	<0.007	<0.005	<0.005		
				10			<0.007	<0.007	<0.005	<0.005		
				20			<0.007	<0.007	<0.005	<0.005		
		500 ^{EC}		10			<0.007	<0.007	<0.005	<0.005		
				20			<0.007	<0.007	<0.005	<0.005		
				333 ^{EC}	10			<0.007	<0.007	<0.005	<0.005	
		20					<0.007	<0.007	<0.005	<0.005		

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
伊予柑 (果皮) 1980 年度	1	1,000 ^{EC, a}	1	5 ^a	/	/	0.034	0.030	0.059	0.057		
				10			0.014	0.014	0.031	0.031		
				20			0.013	0.012	0.075	0.068		
		500 ^{EC}		10			0.012	0.010	0.007	0.007		
				20			0.007	0.007	0.023	0.022		
		333 ^{EC}		10			<0.007	<0.007	<0.005	<0.005		
				20			<0.007	<0.007	<0.005	<0.005		
ゆず [露地・無袋] (果実全体) 2006 年度	1	800 ^{EW, a}	2	10	/	/	0.03	0.03	/			
				20			<0.02	<0.02				
				30			<0.02	<0.02				
すだち [露地・無袋] (果実全体) 2006 年度	1	400 ^{EW}	2	10	/	/	0.04	0.04	/			
				20			0.02	0.02				
				30			<0.02	<0.02				
すだち [露地・無袋] (果実) 2008 年度	1	200 ^{EW}	2	10	/	/	0.01	0.01	0.16	0.16		
				20			<0.01	<0.01	0.15	0.14		
				30			<0.01	<0.01	0.25	0.24		
				40			<0.01	<0.01	0.12	0.12		

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
かぼす [露地・無袋] (果実全体) 2006 年度	1	600 ^{EW, a}	2	10	/		/		0.02	0.02	/	
				20					<0.02	<0.02		
				30					<0.02	<0.02		
かぼす [露地・無袋] (果実) 2008 年度	1	800 ^{EW, a}	2	10	/		/		0.03	0.03	0.35	0.34
				20					0.02	0.02	0.26	0.26
				30					0.04	0.04	0.46	0.46
				40					0.02	0.02	0.30	0.29
りんご [無袋] (果実) 1980 年度	1	42 ^{EC, a}	2	1 ^a	<0.005	<0.005	/		0.022 ^b	0.019 ^b	<0.007	
				5 ^a	<0.005	<0.005			0.034 ^c	0.028 ^c		
	1	18 ^{EC}	2	1 ^a	<0.005	<0.005			0.005 ^b	0.004 ^b	<0.007	
				5 ^a	<0.005	<0.005			<0.005 ^c	<0.005 ^c		
りんご [無袋] (果実) 1981 年度	1	18 ^{EC}	2	3 ^a	/		/		<0.003	<0.003	/	
				7 ^a					<0.003	<0.003		
				10 ^a					<0.003	<0.003		
				15 ^a					<0.003	<0.003		

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)							
					公的分析機関				社内分析機関			
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C	
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値
りんご [無袋] (果実) 1982 年度	1	0.667 ^{EC} /樹 ^a	1	5 ^a	—	—		<0.005	<0.005			
				7 ^a	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
				10 ^a	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
		0.667 ^{EC} /樹 ^a	2	7 ^a	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
				11 ^a	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
				15 ^a	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
		0.4 ^{EC} /樹 ^a	2	7 ^a	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
				11 ^a	0.005	0.005		<0.005	<0.005			
				15 ^a	<0.005	<0.005		<0.005	<0.005			
	1	267 ^{EC}	1	7 ^a	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005				
				11 ^a	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005				
				15 ^a	—	—	<0.005	<0.005				
		267 ^{EC}	2	7 ^a	0.005	0.005	0.007	0.006				
				11 ^a	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005				
				15 ^a	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005				
160 ^{EC}	2	7 ^a	<0.005	<0.005	0.013	0.012						
		11 ^a	0.005	0.005	0.009	0.008						
		15 ^a	<0.005	<0.005	<0.005	<0.005						

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)									
					公的分析機関				社内分析機関					
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C			
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値		
りんご [露地・無袋] (果実) 2008 年度	1	400 ^{EC}	2	7 ^a	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				14 ^a	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
	1		2	7 ^a	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				14 ^a	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
				28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	
日本なし [露地・無袋] (果実) 1982 年	1	133 ^{EC}	1	5 ^a	<0.005	<0.005	/	/	0.023	0.021	/	/		
				7	<0.005	<0.005			0.017	0.017				
				10	<0.005	<0.005			0.014	0.013				
	1	80 ^{EC}	1	5 ^a	<0.005	<0.005			0.016	0.016				
				7	<0.005	<0.005			<0.006	<0.006				
				10	<0.005	<0.005			<0.006	<0.006				
	1	167 ^{EC}	1	5 ^a	0.022	0.022			<0.006	<0.006				
				7	0.018	0.018			<0.006	<0.006				
				10	0.012	0.012			<0.006	<0.006				
	1	100 ^{EC}	1	5 ^a	0.016	0.015			<0.006	<0.006				
				7	0.013	0.013			<0.006	<0.006				
				10	<0.005	<0.005			<0.006	<0.006				

作物名 [栽培形態] (分析部位) 実施年度	試験 ほ場 数	使用量 (g ai/ha)	回数 (回)	PHI (日)	残留値(mg/kg)								
					公的分析機関				社内分析機関				
					MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		MCPB エチル+ 代謝物 B 含量値*		代謝物 C		
					最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	最高値	平均値	
日本なし [露地・無袋] (果実) 2008 年度	1	100 ^{EC}	1	7	0.01	0.01	0.03	0.03	<0.01	<0.01	0.02	0.02	
				14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
	1		1	7	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				14	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				21	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01
				28	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01

- 1 G : 粒剤、SL : 液剤、SC : フロアブル、EC : 乳剤、EW : 乳剤
 2 * : MCPB エチル換算値 (MCPB エチル+代謝物 B)
 3 ・全てのデータが定量限界未満の場合は、定量限界値の平均に<を付して記載した。
 4 ・農薬の使用量及び PHI が登録又は申請された使用方法から逸脱している場合は、使用量及び PHI に^aを付した。
 5 b : MCPB エチルの残留値、c : 代謝物 B の残留値
 6 - : 測定実施せず
 7 / : 該当なし
 8

- 1
2 <参照>
3 1 食品、添加物等の規格基準（昭和34年厚生省告示第370号）の一部を改正する
4 件（平成17年11月29日付け平成17年厚生労働省告示499号）
5 2 農薬抄録 MCPB（除草剤）（2011年12月12日作成）：日本化薬株式会社、
6 未公表
7 3 作物残留分析結果報告書：アグロカネショウ株式会社、2012年、未公表
8 4 食品健康影響評価について（平成26年3月20日付け厚生労働省発食安0320第
9 7号）
10 5 MCPBの食品健康影響評価に係る追加資料要求事項の回答書：日本化薬株式会
11 社、2018年、未公表
12 6 農薬抄録 MCPB（除草剤）（2017年7月12日改訂）：日本化薬株式会社、一
13 部公表予定
14 7 MCPB エチルのラットにおける2世代繁殖毒性試験、GLP対応：（株）化合物
15 安全性研究所、2016年、未公表
16 8 MCPB エチルの細菌を用いる復帰突然変異試験、GLP対応：（株）化合物安全
17 性研究所、2016年、未公表
18 9 食品安全委員会：農薬評価書 MCPA（第2版）、2014年
19 10 US EPA：Reregistration Eligibility Decision for MCPB, and Salts.（2006）
20 11 EC：Review report for the active substance MCPB（2005）
21